
語ることの出来ない剣士

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

語ることの出来ない剣士

【Nコード】

N9535Z

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

突如として起こった魔物の暴走。それにより勃発した<終焉戦争>は、一人の少年から一度全てを奪った。十年後、成長した少年は<力>を携え故郷を後にする。<スレイジア王国王女・キャロル・ドゥスレイジア><虐められる事に快感を感じる少女・メルシア>。道中出会った二人の少女と共に、ムラクモは<ガルシデア>を巡る旅を始める。 基本緩く行きます

第一話・幕開け

その日、数人の子供がここくハイス村く近辺の草原で遊んでいた。その中の黒髪の少年。名は「ムラクモ・ナイレット」と言う六歳の少年。

ムラクモは誰にでも分け隔て無く接し常に明ることから、老若男女問わず人気がある。そんなムラクモを両親である「アドルフ」と「ルミナ」も誇りに思っている。

「じゃあ、また明日！」

「おお！ 明日は勝つからな！」

「ぼくだって！ 明日も勝つよ！」

ハイス村は取り立てて何かがあるという訳では無いが、毎日子どもたちが元気に遊んでいる。村の大人達はそれだけで十分だと思っている。

今日もムラクモは友達と追いかけてこや隠れん坊をして遊び、殆どを勝ちで治めた。今の会話はそれについてのことである。

家に戻ったムラクモは元気に「ただいま」と言い、母であるルミナに抱きついた。ルミナは「あらあら」と言いながらムラクモの頭を優しく撫で、「お帰り」と言い、父であるアドルフも「お帰り」と言いながらムラクモの頭を撫でる。

少し荒っぽいが……。

「さ、手を洗ってきなさい？ もうすぐごはんよ？」
「うん！」

そう元気に返事をして、ムラクモは奥へと小走りで向かい、その背中を、二人は優しい眼差しで見つめていた。

その後、手を洗って戻ってきたムラクモは、今日あったことを楽しそうに話し、ルミナに「落ち着きなさい」と言われても尚話し続け、それは夕食の席でも同様だった。両親はその話をしっかりと聞きながら、明日からもムラクモが元気に過ごせる様にと、それだけを願っていた。

「お父さん、お母さん、お休みなさい」

「ああ、お休み。ゆっくり寝るんだぞ？」

「お休み、ムラクモ。明日も負けるんじゃないわよ？」

「うん」

寝室に入り、布団に入るとムラクモはすぐに夢の中へと旅立った。

「……………」

「……………」

先程とは打って変わって静かになった家の中で、アドルフとルミナは寄り添い合っていた。

「ムラクモも、もう六歳になるのね……………」

静寂を破ったのはルミナであった。アドルフは静かにその言葉に頷く。

「こどもの成長って、早いわね……本当に」

「そうだな。もう少し成長すれば、力のことを話しても良いかも知れない」

「そうね。あの子なら、きっと正しく使うことが出来るわ」

「ああ。………なあ、ルミナ？」

「なに？」

「ムラクモが、村を出ると言ったらどうする？」

その問いにルミナは黙り込んでしまった。

ルミナも、もちろんアドルフもムラクモがずっと村に止まっているような子ではないと分かっている。が、やはり子とずっと暮らしたいと思う思いはある。

「あの子が、それを本当に望むなら、私はその意思を尊重したいわ。あなたもそうよね？」

「……ああ」

もちろん、それはまだまだ先のことだろう。だが、ルミナの言う様に子の成長と言うのは早い。

その時はすぐに来るだろう。

「明日からも、あの子が元気に過ごせますように」

「心配ないさ。何せオレ達の息子なんだからな？」

「……ふふ、そうね」

二人は笑い合い、軽い口づけを交わした。

その後、ムラクモを挟む様にして横になり、二人は眠った。

星が煌めく夜空に、一人の少女がいた。後ろには少女に付き従うように、赤黒い鱗に包まれた巨体を持つくブラッド・ドラゴンくが静かに羽ばたいている。地上には、ハイス村近辺に棲む魔物。くラビくやくガルムくが群れを成している。

「……………」

少女は無言のまま下を見る。

そこにあるのはハイス村。

少女はおもむろに右手を上げ、一泊おいて振り下ろした。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

直後、雷鳴すら生温い程の咆吼が夜空の空気を震わせ、それに続くようにラビ達も雄叫びを上げた。

その日、ハイス村はたった一人の少年を残し、滅びを迎えた。

第一話・幕開け（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第二話・失った物、そして……（前書き）

ムラクモ一人称です。途中から一人称が変わります。

第二話・失った物、そして……

目の前でお父さんとお母さんが殺された。

次はぼくを殺そうとガルムが襲いかかってきた。

——そこからの記憶は無い。

翌朝、気が付いた時に見たのは、荒れ果てた家と、ぼくに手を伸ばして死んでいるお父さんとお母さんだった。

喉が引きつるのを感じながら、ぼくは二人に呼びかける。

いや、呼びかけようとした。

「」

けれど出来なかった。

声が出なかったから。

その後、何度試しても、ぼくの口から声が出ることは無かった。

原因は分からないけど、ぼくは声を出せなくなり、大切な人たちを失った。

声は出なかったけど、涙だけは止まることなく流れ続けて……でもお父さんとお母さんをこのままにしておくなんてこともできなくて、ぼくはお母さんの冷たくなった体を引きずって家の裏まで行き穴を掘って埋めた。

次にお父さんの体を引きずって、お母さんの隣に埋めた。

その時に見た村は、昨日までの村の面影すらない程めっちゃくちゃにされていて、至る所に人が転がっていた。

それを見て、また涙があふれてきたぼくは天井がなくなった家に飛び込み、隅っこで体を丸くした。

それから、何日経ったのか分からない。

けど、じっとしているとお父さんとお母さんが殺された時のことを思い出してしまふ。

気が付くと、ぼくは家から飛び出していた。

そのまま走り続けて足を止めた時、ぼくは近くの森にいた。

暴れる心臓が落ち着くのを待っていると、少し遠くに魔物の姿が見えた。

そいつは、二つの長い耳と黒い毛と赤い目を持つ魔物、<ラビ>だった。

見ていると、そいつもぼくに気付いたようで、ぼくを食べようとでも思っているのか、四本の足を使って走ってきた。

「――！！」

声を出さずに叫び、ぼくもラビに向かって走った。

ただがむしゃらに殴って、体中至る所を噛みつかれたりして、服もボロボロになったけど、それでも手は止めなかった。

止めたら、そこで終わってしまう気がしたから。

仰向けに倒れて、鉛色の空を見上げる。

結果で言えば、ぼくは負けなかった。

でも、勝手もいなかった。

戦っている途中で、ラビの方が諦めたのか帰って行ったから。

この状態で、また魔物が来たら今度こそ死んでしまう。

そう思って、無理矢理体を起こしてぼくは村へと戻って、家に入
った途端意識を失った。

翌朝、お父さんとお母さんが殺された時の夢を見て目が覚めた。

「……………」

また涙があふれてきて、ぼくは、今度は自分の意思で森を目指し
て走った。

ラビを見つけて突撃し、無我夢中で拳を振るった。

体を動かしてさえいれば、二人のことを思い出さないから。

夢中で体を動かし続けた。

今度も勝ちも負けもしなかった。

家に戻ってまた眠る。

翌朝、今度は空腹で目が覚めた。

そういえば、ここ数日は何も飲み食いしていなかったことを思い出し、空腹であることを自覚すると、お腹の音が止まなくなった。

でも、もちろん食料なんて家にはない。

あつたとしても、とっくに腐っていると思う。

でもここハイス村は、いつかくききん>というものが訪れた時に備えて、毎年食料を少しずつ村の倉庫に保管していたから、もしかしたら少しくらいは食べられるものが残っているかも知れない。

奥にある倉庫に向かう途中、友達を見つけたけど、もちろん死んでいた。

他の人たちも同じ様に。

破壊された倉庫の破片などを避けながら中に入り、見てみると思った通り殆どがぐちゃぐちゃに潰れていて、とても食べられる状態じゃなかった。

その中を漁り、なんとか食べられるものを探し出し、少しだけ食べ、あとは家に持って帰った。

これからは、できるだけ少ない食料で毎日を過ごさないとけない。

ごはんを食べて、また森に向かいぼくはラビと戦った。

相変わらず勝つことはなかったけど、二日前に比べればだいぶマシにはなった。

お腹を叩けば動きを鈍らせることができるのかも分かった。

その後、また家に戻って眠った。

それからは、二日に一回朝にごはんを食べるだけで、後は戦って眠るを繰り返して生活した。

服がもつ着ることができなくなってしまったから、落ちていた布を適当に巻き付けた。

戦っている内に、傷の治りが早いことに気付いた。

最初は、ただ夢中だったから気が付かなかったのかも知れない。

ラビに噛まれた程度の傷なら、眠っている間にぜんぶ治っていて、偶に大きな怪我を負っても丸一日眠っていれば完治した。

でも、戦うなら都合の良い体であることは事実だから、特に気にせず戦い続けた。

約一年が経ち、ラビなら勝てる様になった。

お父さんが使っていた短剣を持ち、今度は灰色の毛を持つ魔物、
＜ガルム＞と戦ってみようと思い、一体で行動しているガルムを探して森の中を歩き、見つけた所で周りに仲間がいないかどうかを確認して攻撃を仕掛けた。

ラビとは全く違う動きをするガルムに、最初はもちろん勝つことはできなくて、何度も逃げた。

途中、仲間やラビが来ることもあって本当に危ない時もあった。

それでも、戦うことは止めなかった。

二人のことを思い出して涙を流すことは無くなったけど、やっぱり思い出すのは辛いから……体を動かし続けた。

更に三年が経過した頃には、ラビはもちろんガルムにも負けなくなり、とつくに尽きた食糧を補うためなんとか食べられる様にして食べた。

最初は食べるのが辛かったけど、食べる内になれて、今は普通に食えることができる様になった。

骨を適当な所に埋めて、それに向けて合掌し、今日もオレは森へと向かった。

「グウウウウ……」

目の前で四体のガルムが威嚇している。

木を削って作った自前の木刀を構えて、オレも戦闘態勢を整えようと、ガルムが一斉に飛び掛かってきた。

上体を捻ったり木刀で防いだりして捌き、一体を木刀で叩き、一体を殴って地面に叩きつける。

残っている二体に、踏み込んで一気に接近し横風に一閃して吹っ飛ばすと後の木に叩きつけられ、地面に転がった。

木刀を逆手に持ち背中側に振るとガルムの鳴き声が聞こえ、次いで倒れる音が聞こえた。

最初に殴ったガルムが攻撃を仕掛けてきた訳だ。

四体全てを戦闘不能にすると、茂みから一斉に仲間が飛び出してきた。

保険をかけていたらしく、十以上はいる。

改めて戦闘態勢を取り、ガルムに備える

そして、一瞬の静寂の後聞こえたのはガルムの吠える越えではなく、かと言ってももちろんオレの声でもない。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

森全体どころか、大陸全土に響きそうな、正しく天を衝くような咆吼だった。

それを聞き、ガルムたちは仲間を置き去りにして一目散に逃げ出した。

大きな翼が羽ばたいている音が聞こえて上空を見ると、巨大な影が差し、辺り一帯の木々を潰しながら、数メートル先に巨大な四肢を支えとして降り立った。

そいつは、赤黒い鱗に包まれた巨大な体と、同じく巨大な翼を持つ、本来このくスレイジア大陸くにはいない筈のくブラッド・ドラゴンくだった。

ブラッド・ドラゴンは周辺を見渡し倒れているガルムを見つけると、その大きな口を開き躊躇することなく開きかぶりついた。

ガルムの鳴き声と同時に血が噴き出し地面を汚す。

勝てる訳がないことは分かっていた、けれど逃げることはできなかった。

ラビやガルムなんかとは比べるのはおこがましい程の圧倒的な威圧感が、オレの体から自由を奪っていた。

どれだけ動かそうと思っても、足は竦みきつてしまい指一本すら動かすことができない。

何も考えられずにいると、目の前に迫ったブラッド・ドラゴンが口を開き、闇が広がった。

親父とお袋、友達、村の人たちの顔。

それらが、次々と浮かんでは消えていった。

死ぬのか？

こんな所で、何も出来ないまま——オレは死ぬのか？

そんなのはご免だ！

瞬間、ブラッド・ドラゴンの動きが止まり、おかしい動きを始めた。

いや、可笑しいと言うより、「あり得ない」と言っただ方が正しいか？

首の位置がずれている？

そんな感じだった。

そのことに疑問を抱いていると、何かがブラッド・ドラゴンの体を斬り裂いた。

そして、呆気なく崩れ去ったブラッド・ドラゴンは何か黒い物に呑み込まれ、肉片一つ残さずその場から消え、後にはなぎ倒された木々と、ブラッド・ドラゴンの血が残った。

黒い何かは、ゆっくりとオレに向かってきて、今度こそオレは終わると思い目を閉じた。

だが、どれだけ待っても何の衝撃も来ず、オレはそつと目を開けた。

目に映ったのは、黒い何かがまるでオレのことを心配でもしているかのように、目の前を忙しなく右往左往しているという……どう説明すれば良いのかよく分からない状況だった。

第二話・失った物、そして……（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第三話・受け継いだ物（前書き）

今回でプロローグは終わりです。次回からは三人称で進めていきます。

第三話・受け継いだ物

何もしてくる気配はないので、まずは様子を見ようと思い一歩下がった。のだが、黒い何かはまるで、「離れないでくれ」と言わんばかりにぴったりとくっついてきて、胸に頭？を擦りつけてきた。

子が外出しようとする親にくっついて、「行かないでくれ」とせがんでいる様な物だと考えればわかりやすいか……？

まあ、よく分からないが……敵じゃないのかも知れない。

それなら、オレとしては助かる。ブラッド・ドラゴンをあんな簡単に斬り裂く奴が相手では、オレなど紙を斬る様に斬られてしまう。

と、考えている間も、黒いのはオレにぴったりくっついていた。

お前はオレの敵なのか？

「！」

いきなり黒いのが、ぶんぶんと勢いよく体？を振った。オレが思ったことを否定しているかの様なタイミングの良さに驚き、今度は別のことを思ってみる。

オレの味方か？

そうすると、今度は大げさな程体を上下させた。

その後もとりあえず思いつくことを思ってみると、全てに上下に振るか左右に振るか分からないと言う様に傾げる様な動作をし、こいつが、「オレの思っていることが分かる」ということが分かった。

さっきのブラッド・ドラゴンがまだいると思っているのか、あたりに魔物の気配は全くと言って良いほど無い。

安心して黒いのと会話、の様な物が出来た。

暫くそうして過ごした後、家に帰ることにして森を出口へと向けて歩く。

その間も、黒いのはオレから離れず、寝る時も離れることが無かった。

翌朝、目を覚ますと黒いのはいなくなっていた。

「……………」

寂しいと……また出てきて欲しいと……そう、思った。

「！」

思った途端、足下から黒いのが出てきてオレに飛びついてきた。

訳も分からずにいると、黒いのがオレの手を引き立ち上がらせ目の前で動きを止めた。

——まるで、オレから何か言うのを待っているかの様に。

だから、オレは思いで伝えた。

よろしくな？

黒いのは、また何度も頷いた。

それから六年。

俺は十六歳になった。

成長した俺がしたことは、村を綺麗にすることだった。村人たちは、もう既にみんな骨になってしまっているが、そのまま放置しておいては決して報われることはないだろう。

埋葬することで、少しでも安らぐことが出来るのなら……そう思い、家族ごとに近くに埋葬した。それから、家の残骸なんかをくノア>に呑み込んで貰い片付けた。

ノアと言うのは、黒い奴に俺がつけた名前だ。

ノアは、六年前ブラッド・ドラゴンに襲われそうになった時に現れた俺の力で、それ以来俺の相棒だ。聞いてみた所、十年前俺だけが生き残ったのも、ノアが守ってくれたかららしい。

あの時意識が途切れたのは、その時の俺ではノアの力に耐えられなかったからだと思っている。ブラッド・ドラゴンの時は、ハツキリと意識があつたからな……。

ノアは俺の思いを感じ取り、それによって形を変える。あの時、ブ

ラッド・ドラゴンを斬り刻んだのは、俺に「死にたくない」と言う
思いを、敵を倒すことで形に表した結果なのだろう。

それと、刀や槍、槌や弓矢など、色々な武器の形にもなれるから、
戦闘の幅も広がり、場所に応じた戦い方が出来る。

弓矢に至っては、矢が切れる心配が無いからかなり使い勝手が良
い。

まあ、俺は専ら刀だが……槍や槌も試してはみたが、親父から受
け継いだのか刀の形が一番なじんだ。だから戦う時は、すぐに刀と
して出てくる様にノアにも頼んでいる。

少し脱線したか……。

とりあえず、普段の状態のノアは質量などに何の関係も無く呑み
込むことが出来る。聞いてみた所、限界は無いと言うから大した物
だと思う。実際目の前でラッド・ドラゴンが全て呑み込まれたの
を見た俺としては、疑うことなど最初から無い訳だ。

現に今も、言い方は悪いが、ただの木と化した家の残骸をどんど
ん呑み込んで……見ている内に全部呑み込み終わった。一体呑み込
まれた物はどこに行っているのだろうか？と気にはなるが、なんと
なく怖い気もするので聞いていない。

もし、見せてやると言う意味で俺まで呑み込まれたらどうなるか
……。

最後に自分の家の片付けを始めた。

と言つても、十年間使つていた家だからな……そこまで散らかつてはいない。少し整理するだけで終わりにしようと思い、細かい塵や埃をノアを箒の形にして掃いて、それだけで終わりにした。

が、ノアが家の床を見てずっと動かなかった。

ノア？

呼びかけても返事をしない。こんなことは今まで無かつたから、俺も気になりノアが見ている一点を見る。

ノア！

一瞬にして槌に変わったノアを振りかぶって床に叩きつけると、床を砕いたとは思えない、鋼を叩いた様なガキン！という音が響いた

そして出てきたのは、少し大きな木箱だつた。

それだけなら、「なぜ、こんな物があるのか？」という単なる疑問だけで終わっていただろうが、それ以上に俺は——俺とノアは驚きを隠せなかった。

ブラッド・ドラゴンすら簡単に斬り伏せたノアの攻撃をいとも簡単ににはじき返したのだから、「驚くな」という方が無理だ。

なんとか平常心を保ち、いつもの状態に戻ったノアにははじき返されても大丈夫な様に後ろで支えてもらい、俺はそつと木箱に手を伸ばした。

だが、警戒していたのは裏腹に俺の手は難無く木箱に届いた。

両手でゆっくりと箱を開け中を見ると、そこには綺麗に畳まれた一着の服と、その上に赤く輝く宝石が詰め込まれたペンダントがあった。ペンダントを取り、次に服を取る。すると、その下に二つに畳まれた紙が置いてあった。

服とペンダントを下に置いて紙を取り、開く。

『我等が最愛の息子であるムラクモへ

お前がこの手紙を読んでいると言うことは、オレは今母さんに怒られているのか、それとも、オレもルミナも死んだのか……そのどちらかかも知れないな。まあ、どちらにせよ、お前ももう十六歳になったということか、めでたいことだな。

さて、本題に入ろう。

力のことは既に知っているな？ その力はルミナからお前に受け継がれたモノだ。詳しいことは、使っていく過程で覚えてくれ。そろそろ母さんに変わる』

そこで、字は親父のモノからお袋のモノに変わった。

『愛しのムラクモへ』

力のことは、お父さんが書いたとおりよ。どうしても分からないけど、私はその力を生まれた時から持っていたの。それで何かがあったって言う訳じゃ無いんだけど、一つだけ伝えておくわ。

力の使い方をどうか誤らないで。

私が力について伝えたいのはそれだけよ。

さて、手紙を読んでいるなら、箱に入っていた服とペンダントも見てるわよね？ その服は、昔お父さんが使っていた物よ？ 見た目は只の着物と変わらないけど、物理攻撃や魔法に対する防御力はかなりの物だから、安心して良いわよ？

ペンダントは、私からの贈り物。

装備者の魔力を増幅させる力と、ある程度の魔法ならはじき返す力があるわ。

この二つがあれば何も問題ないわ！ さあ！ 自分の目で見て、自分の手で触れて、自分の足で世界を回ってきなさい！ 村とは比べものにならないドキドキが貴方を待ってるわよ！

あ、それと、大事な人が出来たら連れてきてね？ 楽しみにしてる

から
』

手紙はそこで終わった。

とりあえず、思ったのは……「お袋ってこんな性格だったわけ？」
ということだ。それと、紙面とは言え、こつも急に変わられると呼
んでる側としては少し戸惑う。

もしかしくなくてもこつちが「素」なんだろうか？

黒い着物を着て、ペンダントを首から提げ、少し髪が邪魔だった
から、首の辺りで束ねた。

準備を整えた俺は家の裏に回り、親父とお袋が眠っている場所に
向けて手を合わせた。

『行つてきます』

口だけを動かし、心の中でそう言つて、俺は外に向けてノアと共
に歩き出した。

村の出入り口を出て、振り返り見たのは、家なんて一つも無いと
ても「村」とは言えない状態のハイス村。

十六年間過ごしたこの村に、思い入れが無い訳などなく、名残惜しい気持ちが胸に広がる。

そんな俺の気持ちを察してか、ノアがすり寄ってきた。

大丈夫だと、そう思いを込めながら撫でると、安心したのかそつと離れ、自分から消えた。

俺の意思に反応して出てくることが殆どだが、偶にこつやって自分から消えたり出てきたりする。

「……………」

さて、出発するのでしょうか。

何が起こるかなんて分からないが、それでこそ旅ってのは楽しい物だろう。

面白い奴にも会えるかも知れないしな。

第三話・受け継いだ物（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次はムラクモのプロフィールと世界の事を少し載せます。興味が無ければ飛ばしてくれて構いません。

主人公・世界観紹介（前書き）

必要無いとは思いますが一応載せておきます。

主人公・世界観紹介

名前：ムラクモ・ナイレット 男 十六歳

属性：闇

身長：178?

体重：67?

利き腕：左

正確：温厚。

切れると怖い

……具体的に言うと、終始笑顔を浮かべて相手に直に怒気やらをぶつける。

スレイジア大陸北端にあるハイス村に住む極々一般的な少年だったが、突如魔物の襲撃を受け両親と村の仲間を失う。原因は分らないが、その時に声も失ってしまった。それから四年間は一人で魔物と闘いながら生活し、本来はスレイジア大陸にはいない筈のブラッド・ドラゴンに襲われそうになった際、力が目覚め退ける。

我流で戦い続けた為、気配を隠す手段や探る手段に長けている。

それ以来は、その力にノアと名をつけ共に六年間生活し、十六歳になったある日、両親から譲り受けた着物とペンダントを装備し村を出た。

ノアを刀の形に変形させ戦う。

ノア

ルミナから受け継がれたムラクモの持つ力。主の思念に反応して形を変える。

世界名：ガルシデア

<ライドメール家>が治める<ライドメール大陸>

<マクトウェイ家>が治める<マクトウェイ大陸>

<イノセイド家>が治める<イノセイド大陸>

<ファイゼン家>が治める<ファイゼン大陸>

<スレイジア家>が治める<スレイジア大陸>の五つの大陸から成り立っている。これら五つはそれぞれが<世界貴族>と呼ばれており、力の強い所から大きな大陸を治めている。

見て分かる通り、<スレイジア家>は五つの中で最下位に属している。

中央にある最も規模の大きな<ライドメール大陸>を東西南北から囲むように他四つの大陸がある。

本来<ブラッド・ドラゴン>等の龍種は<ライドメール大陸>に多く棲息している。

<終焉戦争>

十年前、世界各地で魔物が原因不明の暴走を起こし、それにより勃発した人と魔物の戦争。

波の様に押し寄せる魔物達の軍勢が、世界を飲み込むように見えた事からそう名付けられた。

<属性>

火・水・風・地・氷・雷・光・闇の八つの属性が存在し、一人一つが基本となっている。確かめるには体内のマナを指先に集める、又は手のひらの上に出現させる方法があり、その色によって判断される。

火は赤。

水は青と言った具合。

だからムラクモは黒。

補足説明——マナの色と髪・目の色は一切関係ない。

水で赤い髪の人もあるし、火で青い髪の人もある。

ムラクモは単に偶然一致しただけ。

主人公・世界観紹介（後書き）

こんな感じです。

出ないよう努めますが、以降矛盾点などを見つけた時は遠慮無く報告してください。

第四話・キャロルⅡスレイジア

ムラクモが旅に出たその日の深夜、スレイジア王国付近にあるく
始まりの森>に一人の少女がいた。

実は今、ムラクモもこの森にいたのだが、両者とも互いの存在に
気が付いていない。

「はあ、はあ……………ここまで、来れば、大丈夫かしら？」

この少女の名はくキャロルⅡスレイジア>。

スレイジア王国王女、十四歳である。

まだ幼さの残る、けれども端正な顔立ち。

流れる様に腰元まで届いている銀色の髪は月光を受けてキラキラ
と光を放ち、蒼い右目は冷たい印象など与えることなく、逆に暖か
い印象を抱かせる。

そして、何より見る者が注目するのは、そのく黒い左目>だろう。

これには少し事情があるのだが、それは追々説明するでしょう。

そして腰にはスレイジア家の家宝であるく宝刀・シュヴァイス>
を提げている。

鞘、柄から刀身——その全てが白で統一されている。

「それにしても……やけに警備が薄かったけど、どうしてなんだろう?。」

現在キャロルが疑問に思っていることは、城を抜け出すさいの警備の薄さである。

本来ならば、深夜とはいえ、城に仕える騎士団が交代制で警備を行っているが、キャロルの自室付近には人っ子一人いなかったのだ。

陽の高い内に準備を整えていたキャロルは、まずは部屋の番をしている二人の騎士をどのようにして撒こうかを考えていたのだが、結局良い案が浮かばずに夜を迎えた。

だが、いざ外に出てみるとそこには番の二人どころか他の騎士すらいなかった。

「もしかして……王さ……お父様達には気付かれた? でも、それなら追っ手が来るはずだし……うゝん……」

キャロルの中では、「気付いているなら警備を厚くする筈」と言う考えが浮かんでおり、ある種の矛盾点を見つけたことで余計に頭を抱えてしまっていた。

実際はキャロルの考えの通り、王も王妃も娘がここ数日の内に城を抜け出すことを知っていた。

キャロルが外の世界に人一倍思いを馳せていたこと両親だけでなく城に仕える者全員が知っていることであり、皆その願いを叶えてあげたいと強く思っていた。

そのことを知るのは当分は先のことであるが……。

「考えても仕方ないか。今は気付かれないだけで、明日になったら追っ手が出されるだろうし……とりあえず進もう」

考えを切り替え、キャラルは森を進み始めた。

と言っても、現在の時刻は既に前述した通り既に深夜を回っている。

少し進んだところでキャラルは腰に付けている小さなバッグから一人ならすっぽり包み込める程の大きさを持つ布を取り出した。

このバッグは限界こそあるが、その限界に至るまでならどれだけ大きな物でも収納することが出来るといふ便利な物だ。

キャラルが取り出した布は、<グリツサ>という、火属性の魔物の毛皮から出来ており、毛皮そのものが熱を帯びているので夜や寒い地方では重宝されている。

「この辺りでいいかな？ 魔物も、思ってた程いないし」

魔物がいないその理由——キャラルがムラクモの様に気配を探る術に長けていたならすぐに分かっただろうが、これまで十四年間、キャラルは魔物との戦闘を行ったことがない。

今までは、騎士団の訓練を近くで見ながら我流で剣術の腕を磨き、

十一歳になった時から団員の中に混じり実戦訓練も行っていたが、やはり相手が王女となつては手加減抜きで戦うと言つのは憚られる——そういった騎士が殆どだった。

本人がいくら「手加減しないでください」と頼んでも、やはりどこかで手を抜いてしまうのは仕方がないことであらう。

そういった理由で、キャロルはまだ本気の戦いと言つのを経験したことがない。

だが、剣術の腕は騎士団員にも負けていない——いや、間違いなく騎士団よりも強いだろう。

それほどキャロルの剣の才覚には目を見張る物があつた。

（森を抜けたら、道なりに進んで<レークナ>に行つて、ギルドに登録して……その後のことは……それから考えればいいか）

眠い頭ではそれ以上考えることが出来ず、キャロルは眠りについた。

ギルドと言うのは、それぞれの街にある施設であり、魔物の討伐や薬草の採取などを行い、報酬を得る場であると同時に、酒場の機能も果たしている。

もし、この考えを両親含め城の者が聞いていたなら、全員が止めに入っていただろう。

まだ十四歳の少女をそんな所に送り出すのは親でなくとも心配する。

それほど、スレイジ家国民から受ける信頼が厚いということでもあるのだが。

翌日、目が覚めたキャロルは水筒の水を顔にかけて残っていた眠気を飛ばし、そこで大きな力を感じたのだが、一瞬だったため気の所為と片付けた。

荷物を片付け、出発しようとしたキャロルはそこで、はたと自分が王女だと気付いた。

おかしい表現だが、彼女に取って自分が王女だということは当たり前ではない。

事情はあるが、それも追々説明するでしょう。

とにかくにも、自分が王女だと気付いたキャロルは、自身に姿を変える魔法をかけた。

銀色の髪は深紅に変わり、両目も同じ紅に変え、自分の髪を一房つかんで魔法がかかっていることを確認した所で奥へ向けて出発した。

途中、キャロルはいくらなんでも魔物が少なすぎることに疑問を感じていた。

（ここまで一回も魔物に遭遇しないなんて……どうなってるのかしら？）

出発して数時間、そろそろ中心部に到達すると言いつのに、一度も魔物はキャロルの前に姿を現さなかった。

（実戦を一度も経験出来ないのは……先のことを考えると不安なんだけど、魔物を呼ぶ魔法なんてないし……）

恐らく一般的な十四歳の少女なら、魔物を呼ぶ魔法云々を考えることは無いだろうが、育った環境が違うのだから仕方ないと言えば仕方ないのだろう。

そして、これから起こることはある意味ではキャロルに取って幸運である。

——ギヤオオオオオオオオ！！

「ッ！ なに！？」

突然聞こえた咆吼に驚き、キャロルは辺りを警戒した。

次いで聞こえてきたのは大きな地響きと、木々が倒れていく音。

そして見えたのは——

「な……何で、龍種がこんな所にいるのよ」

自身の数十倍はあろうかと言う巨体を持つ青いドラゴン、<ワイバーン>である。

初めて遭遇した魔物が龍種であることにキャラルは戸惑ってしまい、なぜスレイジア大陸に龍種がいるのかと言う疑問を考える暇も無く、只ワイバーンを目の前にして動けなくなるだけであった。

そして、そんなキャラルをワイバーンがみすみす見逃す訳も無く、低い唸り声を上げた直後その口から炎を吹き付けた。

「しまっ——」

やっと体を動かそうと思った時には既に遅く、炎は眼前まで迫っており、キャラルは恐怖のあまり目を閉じてしまった。

そんなキャラルを突如現れた一人の人物が炎の届く寸前の所で救出した。

同時に足下から黒い靄の様な物が出現し、ワイバーンに向かっていったかと思うと一瞬にしてその体を斬り刻み、全てを呑み込んだ。

突然の浮遊感に襲われたキャラルは何が起こったのか、と思い目を開けた。

そして、キャラルを助け出した人物もワイバーンが呑み込まれた

ことを確認し、自分が助け出した少女の身に何も起こっていないか確かめようと視線を下に降ろした。

そうなると当然二人の視線は交錯し、見合う形となる。

「
……………」
「
……………」

少しの間両者とも無言となった。

（真っ黒な髪……………綺麗だなあ……………どんなお手入れしてるんだろう？
それに見た目は細いけど、体つきもがっしりしてるし、有名な冒険者だったりするのかな？）

キャロルがそんなことを考えてる間に、黒い靄のような物も役目を終えたと言わんばかりに青年の足下に戻っていきやがて消えた。

その後、青年はキャロルをそつと地面に降ろした。

「（もう少し抱っこしたい欲しかったかも……………）えっと……………助けてくれて、ありがとう」

ワイバーンはどこに行ったのか？

今の黒いのは何なのか？

疑問があるにはあったが、キャロルはまずはお礼を言うべきだと思いつ言った。

キャロルの言葉に、青年は笑いながら「構わない」と言う様に首

を横に振り、その様子を見たキャロルは名を名乗ることにした。

「貴方、名前は？ わたしは、キャ——」

そこでキャロルはまた自分が王族だと気付き、名乗りを不自然なところで止めてしまった。

「？」

青年の方もいきなり途切れた少女の言葉に、どうしたのかと首を傾けるが、当のキャロルはそのことに気付いておらず、

（どうしよう？ 仮にもわたしは王女だし、本名を言ったら、いくら姿を変えてるって言っても、この人もわたしのことに気付くよね？ うあゝ……えっと……あ、そうだ！ 別の名前を名乗れば良いんだ！ えっと、キャロルドゥスレイジアだから………
…「キャシー」！ うん！ キャシーにしよう！）

と、いうことを考えていた。

本人は気付いていないが、考えている最中頭を抱えたり呻き声を上げたり、体を捻ったりと実に様々な動きをしていた為、青年のキャロルに対する第一印象は「面白い奴」と言う物になっていたのは、当然と言えば当然だろう。

「ごめんなさいね？ わたしは『キャシー』。貴方の名前は？」
「……………」

キャロルの問いに、青年は無言で返した。

一瞬、聞こえていないのかと思ったキャラルであったが、この距離で、しかも周りの音が一切していない状況で聞こえていないというのあり得ないだろうという結論に至り、実際青年にはちゃんと聞こえていた。

「ねえ、ちゃんと聞いてる？」

青年は聞こえていると言う意味を込めて頷いた。

だが、そうするとキャラルから「じゃあ、答えて」と返ってくるのは当たり前だ。

青年はどうしようか困ってしまい、導き出した答えが、

「あつ！ ちょっと、どこ行くのよ!？」

その場から退散することだった。

走って森を進み、出口へと近づいていく青年をキャラルも負けじと追いかける。

途中、ついさっきまで全く出てこなかった魔物達が出てくるようになったが、今のキャラルにそんなことを気にする余裕は無く、構わずに青年を追い続けた。

当の青年にももちろん魔物は襲いかかっているが、青年は黒い刀を用いて一刀の下に斬り捨てていく。

走りながら、キャラルはその剣筋に見惚れるという器用なことを行っており、同時にどこから刀を出したのかと言う疑問も抱いてい

た。

「刀所か荷物を入れる物すら持つてないのに……どうなってるの？
それに、服も見たことない物だし」

青年が来ている服はキャロルの様に上と下で分かれている物では無く、一枚の布で作られており、腰に巻いている大きな帯で止めているという……キャロルにとっては不思議でならない衣装としてのその目に写っている。

ドレスなどを見たことが無いキャロルでは無いが、見たことの無い型をしている為そう写っている。

疑問を抱きながらも、木の枝などはしっかりと避けながら青年を追いかけて、夢中になっていたからか、すぐに出口へと辿り着いた。

先に抜けていた青年は流石に疲れたのか少し先で息を整えていた。

「はあ……はあ……やっと、追いついた」

もちろんその青年を追いかけていたキャロルも疲れている、が、ここで逃がすと次も追いかける自身は無い為、小走りで駆け寄り青年の前に出た。

「どうしていきなり走り出したのかは分からないけど……名前くらい教えてくれないんじゃない？」

それでも青年は口を開かない。

代わりに出てきたのは、あの黒い靄だった。

「！」

何か来ると思ったキャロルはシュヴァイスを抜き構え、それを見た青年は素直に感心していた。

隙が無いからである。

だからと言って腕も達者とは限らないが。

「何をするつもり？」

「……」

相変わらず青年は答えず、またも代わりに黒い靄が動いた。

地面に伸びたそれは土を削り何かを書いていく。

「？」

自分に危害を加えるつもりはないと、なんとなくだが分かったキャロルは構えを解き、けれどシュヴァイスは握ったままでそれを眺め、最後にジャリ、と音を立てて黒い靄は地面から離れ、その文字をキャロルは目で追った。

「？ これ、なんて書いてあるの？」

しかし、読むことができなかった。

「？」

首を傾げた青年は、自分もその文字を読み、自分視点で書いていることに気付きキャロルを手招きした。

それに従い、青年の横に並んだキャロルは、青年から文字列を指さされもう一度眺め、その文字が青年から見た方で書かれていたことに気付き、その文字を声に出して読んだ。

そこにはこう書かれていた。

「『俺の名前は、ムラクモ・ナイレット』」

と。

第四話・キャロルド・スレイジア（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

次回からキャロルはキャシーと統一します。

偶にキャロルになるかも知れませんが、殆どの場合はキャシーと表記します。

第五話・読唇術とギルド登録（前書き）

ムラクモの台詞はモノローグは（ ）。

モノローグ中にノアを使って話すときは（ 」「 ）。

読唇術の時は『 』で表していきます。

ややこしいですがご了承ください。

第五話・読唇術とギルド登録

ムラクモが自己紹介をした後、二人は丁度良い高台を見つけそこで一旦休憩することにした。ムラクモは全く問題等無かったのだが、自分が助けた少女をそのまま放っておくと言うのもやはり憚られるのだろう。

休憩を終え、先に立ち上がったムラクモに続きキャシーも立ち上がり、二人並んでレークナへと続く街道を歩き始めた。が、ムラクモは何故キャシーが付いてくるのかを疑問に感じていた。

休憩中、辺りの気配を探っていたムラクモは、強力な魔物はいないことを知っている。

ムラクモにとって強力の基準はくブラッド・ドラゴン>なのだから、辺りにそんな魔物がいないのは当たり前なのだが、昨夜森に入った時、ムラクモはワイバーンの気配を掴んでいた

キャシーの気配も注意深く探っていれば掴めただろうが、なにぶんワイバーンの力が強く掴めずにいたのだ。

「ねえ、さつきから気になってたけど、貴方どうして喋らないの？」

キャシーは先程の自己紹介の時もそうだが、それ以降もムラクモが一言も発していないことが疑問だった。いくら初対面とはいえ、二人しかいないこの状況では喋らないことはあまり無いだろう。

だが、ムラクモはそんなことを気にした風も無く黒い靄と遊んでいた。

じゃんけんで……。

それは関係ないことだが、目の前の人物が一言も発することが無ければ気にするなという方が無理な話である。

「……………」

質問されたムラクモはノアを出現させ、先程の様に地面に文字を書いていた。キャシーもムラクモとの距離を詰めて見やすい体勢を取る。

（小さいな……俺より年下なのは間違いないが、十……四、五辺りか？）

ムラクモとキャシーの身長には頭一つ半程の差がある。並んで歩いていれば、恐らく周りからは兄妹か何かに見えるだろう。

心の内で別のことを考えながらも、ノアには地面に文字を書かせると言うなんとも器用なことをしつつ、ムラクモは話せない事情を書き終えた。

その文字列をキャシーはまた声に出して読んでいく。

「えつと……『原因は分からねえけど子どもの頃に声を失っちゃまって、それからずっと喋ることができなくなった』って……貴方、辛くないの？」

読んでいくにつれ尻窄みになっていったキャシーは、読み終えた後ムラクモの顔を見ながらそう聞いた。だが、ムラクモは特に気にした風もなく、「別に」という様に首を横に振った。

キャシーは、声が出ないと言う体験をしたことは無い。

無いが、その辛さは少し考えれば分かることだろう。

「何も伝えられないのよ？ 『今日は何がしたい』とか『明日はこれがしたい』とか、食事で『何が良い？』って聞かれても、何も伝えられないのよ？ それなのに、本当に辛いくないの？」

まるで自分のことの様に言うキャシーを見て、ムラクモは優しく頬笑んだ。

「ん……なに？」

そして、キャシーの頭に左手を乗せそつと撫でた。

戸惑うキャシーをよそに、ムラクモはまたノアに頼み地面に文字を書いていく。

キャシーはその文字列を今度は声に出さずに読んだ。

（「キャシーは優しいな。確かに何も伝えられねえけど、俺の周りの奴は親父とお袋も含めてみんな死んじまったから、そんなこと心配しなくてもいい」

「そんなこと」で片付けられる問題じゃない……周りに誰もいないなんて、悲しすぎるよ、そんなの）

自分では耐えられない。

キャシーはそう感じていた。

その後、キャシーは何も言わず下を向いてしまい、沈黙が二人を支配していた。

（腹減った）

と言うわけでもないらしい。

ムラクモは全く持つて場違いなことを考えており、「ガルムかなんか出てこないかな？」と、食料のことを考えていた。

その願いが通じたのかどうかは分からないが、丁度良いタイミングで茂みがガサガサと音を立て、六体のガルムと一体のくヘルガルムが姿を現した。

ヘルガルムはガルムよりも一回りほど大きい魔物であり、その体は赤い毛で覆われている。この辺りでは少し強い魔物の部類に入るだろう。

だが、

（お！ 飯発見！ ノア！）

ムラクモにしてみれば「食事」としか写らない様だ。余程腹が減っているのだろう。

「！ 魔物！」

ムラクモはノア、キャシーはシュヴァイスを構えた。

（一気に行くぜ！ ノア！）

「え？ ちょ！」

構えるとほぼ同時にムラクモはガルムの群れに一足跳びで近づき、

「ガウ！？」

驚いているガルム達を一撃で全て倒した。

「は——？」

キャシーはたった今日の前で起こったことが信じられず、頓狂な声を上げた。

今の今まで隣にいた人物が一瞬で魔物の群れに近づき、同じく一瞬で七体を斬り捨てたのだから当たり前だろう。

（騎士団でも、あんな動き出来る人なんていない……何者なんだろう？ ムラクモって）

そう思いながら、キャシーはムラクモの元まで小走りで駆け寄り、そこでまた驚いた。

「え！？」

（うお！ ビックリした）
「あ、ごめん」

体を跳ね上がらせたムラクモにキャシーは謝り、改めてガルム達を見た。

「ねえ、どうして血が出てないの？ 斬ったよね？」

キャシーが驚いた理由、それはガルム達の体から血が出ていないからだった。

（「内蔵器官にダメージを与えて心肺活動を停止させたんだよ。なあ、お前火持つてるか？」）

「火？ ううん、持ってない」

地面に書くのが面倒になったムラクモは、ノアの形を変えて伝えることにしたらしく、キャシーの目の前に黒い文字列が並び、その質問にキャシーは答えた。

（「そうか」）

それだけ答えたムラクモは、ヘルガルムを持ち上げノアの中に放り込んだ。それを見てキャシーはまた驚きの声を上げた。

（忙しい奴だな）

そう思いながら、ムラクモはガルム達も次々とノアの中に収納していく。

（うし、サンキュー、ノア）

パシン、と手を叩くムラクモとノア。

「さつきから質問ばかりで悪いんだけど、その黒いのは何なの？」
（ん？ああ。「お袋から受け継いだ力だな。名前は『ノア』。質量とかに関係なくなんでも呑み込めるんだ。しかも限界が無い。さつき、ワイバーンを呑み込んだの、見てなかったか？」）

「限界が無いって！　ていうか、ワイバーンを呑み込んだ！？　嘘でしょ！？」

（「本当だよ。お前、ワイバーンがどつか飛んでいくのでも見たか？」）

「……………そう言われると、確かに」

（「だろ？　それに、今だってガルム達を呑み込んだじゃねえか」）
「……………」

それを言われると、見ていただけにキャシーは何も言えなくなつた。

（「んで、いきなりだが、お前これからどうする？　俺はとりあえず道なりに進むつもりなんだが」）

「……………わたしはレークナに行つて、ギルドに入るわ」

（ギルドね。そういや、そんなのもあったな。「そうか。じゃあ、そこまでは一緒にいいか？」）

「ええ」

（「んじゃ、あと少しだけど、よろしくな？」）
「よろしく」

ムラクモとキャシーはお互いの手を取り合った。

「それはいいんだけど、そのノアを使って文字を書くのは止めて。」

なんか嫌」

（「じゃあ、どうすりゃいいんだ？ 『話せない』 っていうのは、さっき言っただろ？」）

「……………」

至極真つ当な疑問に、キャシーは何も考えていなかったように黙り込んでしまった。髪を弄りながらどうしようかと考えている。

これは彼女の癖であり、悩んだ時や考え事をする時はいつもこうしている。

そのまま数分が経過し、その間ムラクモはノアを短剣に変えてポンポンと軽く投げて遊んでいた。

「読唇術」

（は？）

やがてぼつりと言ったキャシーの言葉にムラクモは心中で頓狂な声を上げた。

「うん。口の動きで何を言ってるのか分かれば、それで会話が成り立つわ」

（そんなこと出来るのかね？）

その疑問にノアは首を傾げるように体を傾けた。

「という訳で、今から練習するわよ？ ほら、何か言ってみて？」

ムラクモとは反対に、キャシーはすっかりやる気になっており、「いつでも来い」と言わんばかりにムラクモの口を見ている。一度溜息を付いたムラクモは、「やるだけやってみよう」と思い、適当に自分の名前を言ってみた。

「『ムラクモ・ナイレット』？」

「！」

「あ！ その反応、合ってるのね！ やった！」

ムラクモの反応を見て、言ったことが合っていると判断したキャシーは、まるで花が咲いた様に満面の笑みを浮かべ、その場でぴよんぴよんと飛び跳ねた。

「ねえ！ 次、今度は別のことを試してみて？」

若干興奮しながら言うキャシーの言葉に戸惑いながら頷き、ムラクモはハイス村から来たことを言った。

「ハイス村？ へ……大陸の北端ね。それであの森にいたんだ」
「！」

またしても見事に当てられ、ムラクモは驚きを隠せなかった。

「あ！ また当たった！」

またしても、キャシーは飛び跳ねて喜びを表現し、飛び跳ねる度に赤い髪が風を受けて広がる。

キャシーが貴族世界貴族の一家である、＜スレイジア家＞の娘であることは既に前述している。

年に数回程、中央の＜ライドメイル大陸＞では大規模なパーティーが開かれ、もちろん、＜スレイジ家＞も参加した。その中で、様々な人物を見てきたキャシーは自分でも気付いていないうちに口の動きで何を言っているのかが分かる様になっていた。

その中には、悪意に満ちた言葉もあった。

というより、悪意に満ちた言葉しか無かった。

最下位に属するスレイジ家は常に、他の四つの世界貴族から蔑まれ続けていたのだから。

話を戻そう。

とにかく、キャシーは相手が余程早口や、見慣れない動きでない限りはどんな言葉でも動きだけで読み取れる様になった。

「やった！ これでちゃんと話せるわね！」

(……まあ、いいか)

ムラクモも、悪い気はしない様で、喜ぶキャシーを頬笑みながら見ていた。

その後、二人は会話を楽しみながらレークナに向かって進み、夜寝る時、またキャシーは驚いた。

「毛布にもなるって……その子すごいわね？」

『だろ？　しかもかなり暖かいんだぜ？　お前も一緒に使うか？』
「は！？　何いつてるのよ！」

ムラクモの言葉にキャシーは何を想像したのか、顔を赤くしながらそう言い自分の持っている毛布にくるまった。

（暖けえのにな……）

ムラクモもノアにくるまり目を閉じた。

翌日、目を覚ましたキャシーは、水を被って眠気を飛ばし、未だ眠っているムラクモの顔を見た。

「結構格好いいな……」

言いながらキャシーはムラクモの頬をつつき、それで目が覚めたのか、ムラクモはガバリと勢いよく起き上がった。

驚きつつも、挨拶を交わし、準備を整える二人。

暫くして、完全に目が覚めたムラクモはキャシーと共に歩き出した。

数時間後、レークナに到着した二人はまずはギルドに向かうことにした。

途中ムラクモは、初めて見る村以外の建物を終始興味深げに観察しており、そんなムラクモをキャシーはくすくすと楽しげな笑みを浮かべて見ていた。

二人とも気付いていないが、笑顔を浮かべるキャシーに男女問わず見惚れていた。

「ここはね、王国に一番近い街だからいろいろな物資が揃うの。武器や防具なんかも、沢山あるんだよ？ 後で見ってみる？」

様々な家が建ち並ぶ街を眺めているムラクモに、キャシーは簡単にだがこの街のことを説明し最後にそう提案した。

『そうだな…… つつても、ノアがいるし、防具もこれで事足りるんだが』

「でも、薄すぎない？ その衣装」

『確かに薄いけどな。お袋が言うには、相当高い防御力を持つてるらしいぜ？ それと、このペンダントはある程度の魔法なら弾き返すことができるんだとさ』

「そうなの？ 只のペンダントかと思った」

『俺も最初はそう思ったけどな…… ノアの攻撃も弾いたから、本当だと思うぜ？』

ムラクモはノアの力を、魔法の一種だと考えている。そう考えると、箱を見つけた時に弾き返されたことも説明が付くからだ。

（でもな…… 過信してる訳じゃ無いが、ノアの攻撃を弾くってこと

は、このペンダントが防げない魔法なんて無いんじゃないか？
ブラッド・ドラゴンもワイバーンも一瞬で片付けるし」

「まあ、貴方が良いならそれで良いけど……っと、着いたわよ？」

話している間に目的の場所に到着した様で、キャシーは少し先に行ってしまったムラクモを呼び止めた。戻ってきたムラクモが、ギルドの扉を開け躊躇い無く中へと入っていく。キャシーは少し緊張しているのか、ムラクモの着物の裾を小さく摘み後について行く。

（酒場にもなってるのか……やけに注目されてるのは、キャシーが可愛いからかね？ 別れた後に何も起こらないといいが）

ギルドに入った二人を初めに迎えたのは、中にいる者達から容赦なく浴びせられる視線だった。特に男からの視線が多いのは気の所為ではないだろう。

だが、ムラクモは全く気にせず奥へと進み、受付の元まで辿り着いた。

『キャシー、俺話せないから、手伝ってくれるか？』

「え？ あ、うん、分かった。あの、わたし達、登録しに来たんですけど」

「分かりました。こちらの用紙に必要な事項を書きただけですか？」

「はい」

紙と筆を受け取り、名前、年齢、出身地を記入し、受付の人に渡すと、記入漏れが無いかを確認し始める。

「結構です。カードを発行しますので、少々お待ちください」

「はい」

書類を持ち奥に行ったのを確認すると、ムラクモはギルドのことをキャシーに聞いた。

「ギルドは、民間の人から魔物の討伐依頼や採取依頼をこなして報酬を得るの。簡単に言えば、『何でも屋』って所かな？」

『何でも屋、ねえ……それって、仕事を横取りされることなんかもあるのか？ 達成間近で取られるとか、自分が採取した者を強奪されるとかさ』

「もちろんあるわ。でも、貴方の例を借りるなら、前者はその人の実力不足だし、後者も結局は奪われる人の力不足なのよ」

『……弱肉強食の世界って訳か』

「そういうこと。どれだけ立派な志を持っていても、力が無ければ何もできないわ。嫌な言い方だけどね」

「お待たせいたしました」

そこで受付の人が、二枚のカードを持って戻ってきた。

「こちらがムラクモ様、こちらがキャシー様の物となります。紛失されますと、再発行には百ギールが掛かりますので、ご注意ください。何かご質問はありますか？」

『（結構高いんだな……）なあ、この『ランク』って欄はなんだ？ 何も書いてねえけど』

「そこは今から自分でやるの。質問は特にありません。ありがとうございます。ございました」

「いえ。それでは、これからのあなた方の活躍を期待しております」

その後二人は空いている席に座り、ムラクモはランクについての

説明を受けることになった。

「ランクは、その人の力量のこと。G→EXまであって、もちろん上に行くほど強いってことになるわ。依頼にもランクはあって、自分より二つ上のランクの依頼までしか受けられないの」

『結構面倒なんだな?』

「ランクの低い人がドラゴン退治なんて受けても、結果は目に見えてるでしょ?」

『成る程。それで? どうすれば自分のランクが分かるんだ?』

「カードの中央に少し窪んでるところがあるでしょ?」

言われてムラクモはカードの中央を見る。

そこは確かに少し窪んでいた。

「そこに自分のマナを集中させれば、それで分かるわ」

(マナを集中してもな……)

そんなことをしたことの無いムラクモは、どうすれば良いのか分からずとりあえず指先に力を集めて見るか、という感覚でマナを集め、中央に押し当てた。キャシーも同じように、指先にマナを集め中央に押し当てる。

(お、出た、のはいいが……微妙だな)

「E、か。ムラクモは……って、どうしたの?」

自分のランクを確認したキャシーは、ムラクモのランクを聞くとしたが、微妙な表情をしているムラクモを見て何かあったのか、と思いそう尋ねた。

『いやな？ 俺としては微妙なランクでさ』
「なんて表示されたの？（あの戦い方からしても、結構高ランクだと思っただけ）」

しかし、そんなキャシーの期待は大いに裏切られることになった。

『F』

「は!？」

ムラクモのランクを聞いた途端大声を上げたキャシーにギルド内のほぼ全員が注目した。

第五話・読唇術とギルド登録（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第六話・ムラクモVS金髪男

「あ、すいません」

恥ずかしかったのか顔を赤くしながら席に着き、一つ咳払いをするキャシー。

『どうしたんだよ？』

「どうしたもこうしたも！　なんでわたしより低いのよ！」

『んなこと言われてもな……』

「だって！　ガルムの群れを一撃で倒したし！　ワイバーンだって一瞬で片付けたんでしょ！」

「ほづ。その話、詳しく聞かせて貰おうか？」

「え？」

キャシーが叫んだ時、話を聞いていたらしい金髪の男がムラクモを見下ろしていた。周りの者達も興味を持ったのか、二人を見ている。

「ワイバーンを倒したとはどういうことだ？」

「……なに？　あなた」

「質問しているのはオレだ」

「む」

男の態度に頬を膨らませ、キャシーはムラクモを見た。

『ま、さっさと答えて、さっさと退散してもらうのがいいんじゃないね

え？ 面倒だし』

「……そうだけど……信じるとは思えないわよ？ 龍種がこの大陸にいるってだけでも、きつとここにいる大半の人が信じないわ」
「何を言っているかと思えば、そんなことは当たり前だ。龍種は＜ライドメール大陸＞にしか棲息していない」

そう言う男を見た後、またムラクモに視線を戻した。その目は言外に「言った通りでしょ？」と言っている様にムラクモに写り、ムラクモも「確かに」と共感していた。

そしてノアに出てきて貰い、ムラクモはその中に無造作に手を突っ込み何かを探し始めた。

(え〜と……………お、あつた)

その中から目的の物を見つけたムラクモは、それが片手では持ちきれない大きさの為、両手で引っ張り出し机の上に置いた。

それはドシン！と大きな音を立て、机を軋ませた。

言わなくても分かっていると思うが、ムラクモがノアを出現させた時点でギルド内にいた全ての人間が驚いていたのだが、そこから出された物を見て皆は一言も発することができなくなった。

その中でなんとかキャシーだけが口を開いた。

「あ、貴方……………これ……………ワイバーンの……………く、く」

『ああ。ワイバーンの首』

「……………」

そう、ムラクモがノアから取り出したのは昨日の朝倒したワイバーンの首である。なにより説得力のある証拠を見せられ、何も言えなくなっていた者達は更に何も言えず、開いた口が塞がらない状況になっていた。

「ハッ！ き、貴様！ そのワイバーンを貴様が倒したと言う確たる証拠はあるのか！？」

いち早く現実に戻ってきた金髪男がムラクモを指で指しながらその声を張り上げた。

（人を指さすなって教わらなかったのか？）

と思いながら、ムラクモはまたノアに手をつ込み、ワイバーンの斬り刻んだ体を次々と出していった。倒した証拠は無いが、そんなことは本人にとってはどうでも良いことである。

「ハッ！ あなたね！ これを見ても……うわ！ なんかいっぱい出てる！」

次に戻ってきたキャシーは、目の前にあるワイバーンの首に加え、翼や脚などが追加されていることに驚いた。

「ふん！ では、お前はこの男がワイバーンを倒す瞬間を見たと言うのか？」

「ぐ……それは」

（はあ。俺じゃなくてキャシーに絡むとか……面倒だな）

そう思ったムラクモは席を立ちキャシーの前に出た。金髪の男を面倒くさそうに見て、その後キャシーの方を向きあることを言った。

「なんだ？ そいつは何を言っている？」

傍から見れば、ムラクモは声を出さずに口だけを動かしていると
言う変な人間として映っている。事情を知らなければそうなって当
然だが……。

「『お前と俺が戦って、俺が勝てば認めるか？』だって。あ、今の
はわたしじゃなくて、ムラクモが言ったことだから」

面倒になったムラクモは手っ取り早く証明するにはその方法が一
番だろうと思い、そう提案し、キャシーは誤解されないようにそう
付け加えた。

それを聞いた金髪の男は何か可笑しいのか、初めは声を押し殺し
て笑っていたがやがて押さえきれなくなったのか大声を上げて笑い
始めた。

「ハハハハハ！ 面白いな！ いいぞ、その勝負受けてやろう！」

そしてムラクモの提案を承諾した。

「ムラクモ、大丈夫なの？ あいつ、結構強いわよ？」

『別に良いって。俺は勝つつもりも負けるつもりもねえから』

「え？ じゃあ、なんでこんな提案したの？」

『あのままだとお前に矛先が向いてただろうな……と思ってな』

「え？ わたしの為？」

『ま、結果的にそうなるのかな？ 悪かったな？』と、ムラクモは
そう言ってキャシーの頭に手を乗せ、キャシーは顔を赤くした。

その後、ギルド裏庭にてムラクモVS金髪男の勝負が行われることになり、誰が言い出したのか、「どちらが勝つかを賭ける」者達が出てきた。更にこういった話が広まるのは早い物で、聞きつけた民間人や休憩中の職人などもギルドの裏庭に来ていた。

「ムラクモ、あいつランクBですって。やっぱり結構強いわ」

『関係無いって言ったろ？ ていうか、お前ここにいるとまたこんなことに巻き込まれるかも知れねえぞ？』

ムラクモが勝負をしようと言い出したのは、先程の理由もあるが、もう一つはキャシーをこの場から逃がすこともあった。それは本人によって難無く崩されてしまったが……。

「いいの。原因はわたしなんだから、これが終わるまではいる」

意思是堅いようで、言葉の通りこの騒ぎが終わるまでは、この場から離れるつもりは無いようだ。

「それで、どう戦うの？ 人相手に戦ったことなんて、無いわよね？」

『確かにねえけど、槍なら使ったことはあるから間合いくらい分かってるよ。ほら、危ねえから下がってる』

「……分かった。負けないで！」

『おう』

二人は拳を合わせた。

その後、右手をさすっているキャシーが見受けられたとかなんと

か。

「準備はいいか？」

頷いたムラクモを見て、金髪男は全体が細い槍を構えた。それを見たムラクモも腰を落とし拳を握る。

「オレ相手に素手で戦うつもりか？」

『そうですがなにか？』

「なぜ声を出さないのかは分からぬが、後で後悔するなよ！」

金髪男のその言葉から、二人の戦いは始まった。

十分な力を込めた踏み込みで一気にムラクモとの距離を詰めた金髪男は常人では躲せない速度で槍を突き出した。

（Bってことは……EXの下の下？　ん？　EXの下ってAか？
後で聞こう）

そんなことを考えながら、ムラクモは槍を軽くいなし同時に金髪男の足に右足をかけた、一歩下がって再度拳を構えた。金髪男も流石高ランク者と言うべきか、これ位で倒れることはなく、見事に体を捻り体勢を整えた。

次いで金髪男は連続で突きを繰り出すが、ムラクモはそれらを全て最小限の動きで躲していた。

（ランクBってのは、こんなもんなのか？　それともコイツが弱いだけか？）

躲しながらムラクモはそんなことを考えていた。

（それに、さつきから妙な視線を感じるが……）

戦闘が始まる前から、ムラクモは視線を感じていた。もちろん今はこの場にいる全ての人間がムラクモと金髪男を見ているが、それらの視線とは違い、探るような視線である。

（なんか寒気がする）

同時に悪寒にも襲われていた。

「チィ！　ちょこまかと動きおつて！」

次第に焦りが生まれたのか、金髪男の槍の動きが最初に比べて鈍くなっていることをムラクモは確認した。

（そろそろ終わらせるか）

そこでムラクモは攻勢に移ることにし、その後勝負は一瞬にして着いた。

「ハアッ！」

裂帛の気合いを込め放たれた突きをムラクモは右半身をずらして躲し、槍に向かって真上から垂直に左手手刀を落とした。

「な……」

バキンと良い音を立て、中央から綺麗に折れた槍を見た金髪男は言葉を無くし、呆然とその場に立ち尽くしていた。周りの者も何も言えず、場を静寂が支配した。

「やったー！」

そんな中で、キャシーがそう叫び、ムラクモに向かって突撃した。

そう、文字通り「突撃」した。

（ゴハッ！）

鳩尾に渾身の一撃をお見舞いされたムラクモはその場に倒れた。

「え！？ ちょ、ムラクモ！ ムラクモしっかりして！ 一体誰にやられたの！？」

お前だよ、とその場にいる全員がつっこまずにはいられなかった。

「ムラクモお！ しっかりしてえ！」

その後、ガクガクと揺さぶられたことにより、かろうじて保たれ

ていたムラクモの意識は完全に断たれた。

「おもしろい」

そう言ったのは、ギルドの屋根からムラクモを見ていた少女である。

黒い瞳を持ち、ムラクモに負けず劣らずの黒髪を胸元で結んでおり、背中には身の丈程の長さを持つ、＜大太刀・ドラゴンキラー＞を携えている。

黒い革製の服で上下を揃えており、下は動きやすさを重視している為か相当短く、太ももの真ん中辺りまでしかない。

少女はもう一度ムラクモを見た後、屋根から姿を消した。

「たのしくなりそう」

最後にそう一言残して――。

第六話・ムラクモVS金髪男（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第七話・次なる目的地

ギルド内の医務室に運ばれたムラクモは何か寒気を感じ目を覚まし、同時に腹部の痛みが蘇り、キャシーの思いがけない威力の攻撃を思い出した。

（強力過ぎるだろ、あれは……）

と心の中で愚痴っていると、扉が開きキャシーが入室してきた。

「あ、起きた？ 貴方、戦いが終わった後気絶したのよ？」

（トドメはお前だったけどな……）

ムラクモはそう思ったが、口を動かすとまた面倒が起こりそうだったので思うだけに留めた。

持ってきた水と水差しをベッド近くの棚に置き、キャシーはベッドに腰掛けた。

（小せえ体だな……。そういや、なんでこいつは旅してんだ？）

そんな疑問がムラクモの頭には浮かんだが、本人が話そうとしないなら無理に聞いてもしょうがないだろうと思いいこれも思うだけに留めた。

「……………」

「……………」

ただでさえムラクモは話することが出来ない、そんな状況で二人きりになり、その一方が何も話さなければ必然的に場を沈黙が支配することになる。今度は、道中の様にムラクモは何かを考えている風は無い。

無いが代わりに、

（じゃんけん、ほい！ うし！ 勝った！）

じゃんけんをしていた。

（んじゃ、今度は六人でやるぞ？）

その意思に従い、ノアは体を六つに分けそれぞれが拳を握った。

（じゃんけん、ほい！ あいこ、で、しょー！）

ムラクモの意思に従って動いてるんだから必ずムラクモが勝つんじゃないか？と言う疑問を抱いた者もいるかも知れないが、ノアが自分から消えたり現れたりすることもあったことを覚えているだろうか？

つまり、今の様にじゃんけんや何かで勝負をする時は、ノアは自分の意思で動いている為どこにもおかしい所は無いのである。

（七人でやると中々終わらねえな。次であいこだったら、じゃんけんは終わりな？じゃ〜んけ〜ん……ポン！ ぐあ、負けた！）

「……何してるの？」

『ちよつとな、ノアとじゃんけんを。頼むからそんな目で見ないで

くれるか？」

何故かベッドが揺れていることに疑問を持ったキャシーが後を見ると、そこではムラクモがノアと何かをしておりその時の動きでベッドが揺れていた訳だが……キャシーはそんなムラクモをジト目で見ていた。

「まあ、いいけど。これからのことだけど、わたしは少し資金を貯めたら街を出るわ。出来るだけ急いで王国から離れたいし……貴方はどうするの？」

『少し依頼を受けたら出る』

「そうなんだ……あ、あとこれ」

『ん？ 何だ？』

立ち上がったキャシーはバッグから袋を取り出しムラクモに差し出した。流れで受け取り、中を確認するとムラクモは驚愕に目を見開いた。

中に大量のギールが入っていたからである。

「ワイバーンの首とか脚とか翼とかね……ギルドの人に本物だつてことを確認してもらって、その場で換金してもらったの。角とかは、武器屋さんに持って行けば武器に加工してもらえるって言うから、一応貰ってきたわ」

そう言つて今度は角を取り出すキャシー。だが、ワイバーンの角はキャシーが両手で持たなければいけない程の大きさを持っており、その体はふらついていた。

その結果、

「にやつ！」

ベッドに躓きムラクモの上に倒れるのは当然と言えるだろう。

「あ、ごめん……」

素直に謝るキャシーの頭を、ムラクモはまた撫でた。

「あう……」

流石にキャシーも恥ずかしいのか、顔を紅潮させながらムラクモを上目遣いで見た。

なんだかんだで、この二人は相性が良いのだろう。

二人で過ごす時間を、どこかで心地よく思っている。

『とりあえずだな、この金はお前が持って行け。あ、やっぱ駄目だ。その辺の奴に狙われるかも』

差し出した袋をすぐに引っ込めたムラクモを見て、キャシーは暫く無言になったが、

「ねえ……わたしと一緒に旅しない？」

やがて、ポツリとそう言った。

『は？　なんだ、いきなり？』

「いや、その……なんていうかね？　貴方とは会ったばかりだけど、不思議と一緒にいるのが楽しくて……それに、そのお金も、わたしが持つてるのが危ないなら、貴方が一緒にいれば取られる心配も無いでしょ？」

ムラクモの疑問にキャシーはたった今思いついた考えを述べる。

『ああ、成る程。そうだな。じゃ、一緒に行くか』

「え？　ホントに良いの？」

『ああ』

まさか、こんなにあっさり承諾してくれると思っていなかったキャシーは純粹に驚いた。

『それで、次はどこを目指すんだ？』

「……あ……道なりに、＜デイロウア＞に行こうと思ってる。武器職人、剣士、魔術師とか色んな人が集まって、年に五回、街挙げての大会が開かれるの」

『随分と血気盛んな街だな。それで？　すぐに出発するか？』

理由は分からないが、キャシーが何か急いでいることは先程の台詞からも分かってているムラクモはそう問いかけたが、キャシーは、「そんなに急がなくてもいい」と首を横に振り言った。

「武器屋さん行こう？　角の加工とか、して貰いたいし」

『そうか。で、それはいいが、早く起きてくれるか？　その角結構重いんだよ』

「あ、ごめん」

この会話中もキャシーは倒れたままであった為、角がずっと足に押しつけられていて地味な痛さをムラクモは感じていた。言われてやっとそのことに気付き、キャシーは体を起こして角をバッグにしまった。

ベッドから出たムラクモは体を解し、水を一杯飲み、その後医務室を出てギルド内の者達の視線を浴びながらも気にすることなく外に出た。

『武器屋はどこにあるんだ？』

「そこ」

ぴつ、とキャシーが指さしたのはギルドの二つ隣の建物。

その動作を見たムラクモは何故か和んだ。

（可愛い奴だ）

早速店に向けて歩き始めた二人。

ムラクモは先程金髪男と戦っていた時に感じた視線をまた感じたが、場所は掴んでいる為無視することにした。その内痺れを切らして出てくるだろうと考えたからだ。

そのまま、キャシーは何も気付かず、ムラクモは無視を決め込み、

武器屋へと入っていった。

第七話・次なる目的地（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第八話・ムラクモVS漆黒の少女

さて、ムラクモを見ていた少女だが、少女は気付かれていることに気付いていた。そんな状況を少女は楽しんでいる。

いや、

「ハアア……」

悶えている。

悩ましげな吐息を吐き、頬を赤らめ自分の体を抱きしめ、くねくねと動かす少女は色々な意味で目立っているが、少女は何も気にしている様子はなく、ムラクモが次はどんな対応を取るのか楽しみにしていた。

少女が何故さつき見たばかりで一言も話していないムラクモにここまで興味を持っているのかと言うと、それはムラクモの力にある。知つての通り、ムラクモの力であるノアは、意思に従ってその形を様々な物に変えることが出来る。

先の戦闘でその力をムラクモは使っていなかったが、この少女は少々特別であるため、その力を感じ取ることが出来た。

「早く出てこないかしら？」

そんなムラクモを待つ少女に近づく男が二人。

「なあ、その姉ちゃん」

「ちいと、僕たちに付き合ってくれない？　すぐに終わるからさ」

「遅いわね……何してるのかしら？」

しかし、少女の耳にはまるで入っていないらしい。見事なまでに二人を無視している。そうされると当然、人としては良い気分はしない。

「おい、聞いてんのか？」

「私も行く？　いやいや、待ってるからこそ良いのよ。あゝ、でも早く見たい」

少女は完全に自分の世界に入っている様で、まるで聞いていない。自分たちが完全に無視されていることに男二人は余程気が短いのかすぐに切れ少女の手を掴もうとしたが、

『
「そうね。この後どうする？　何か依頼でも受けてみる？」
』

そこで少女の待ち人が武器屋から出てきた。

（今、何を言ったの？　彼）

少女には、ムラクモが只口を動かした様にしか写っていないが、隣にいるキャシーは、なんと言ったか分かるように言葉を返している。そのことに疑問を感じていると、ムラクモが少女の方を一瞬チラリと見て、何か面倒くさそうな顔をしたのを少女も見た。

その後、ムラクモはキャシーに何か言々と少女の方へと向かってきた。

（あら、もう終わり？ ん？ 後ろ？）

ムラクモは少女に近づきながら、「後ろを見る」と言う様に指指した。それに従い後ろを見た少女は、そこで漸く男二人の存在に気付いた。

（どこに行っても変わらないのね？）

少女は自分に手を伸ばそうとしている男を見て心底嫌そうな顔をした。少女は正しく絶世の美女と言っても過言では無い美しさを持つており、そんな少女が街を歩いていれば、邪な考えを浮かべる者は当然出てくる。これまでに何度も、少女はその経験をしてきた。だからうんざりしているのである。

「あ？ なんだ、その目？」

「生意気な奴だな」

「はあ……」

溜息を付いた少女は背中の大太刀に手を掛、引き抜くと同時に男達を斬ろうとしたが、

「っ」

それは他でもないムラクモによって止められた。

「なに？」

『……………』

「なんだ、テメエ？」

ムラクモは何も言わずノアを出現させ、少女の前に文字列を作り、少女はそれを読んだ。

「『こんな所で流血沙汰を起こすな？　どうして貴方にそんなことと言われたいいけないのかしら？　私がどこで何をしようと勝手よ？』」

（「目の前で人を殺そうとしている奴がいたら、普通は止めると思うぞ？」）

「お「だからなに？　言っただでしょ？　『どこで何をしようと私の勝手』だって」

完全に無視されている男の一人が何か言おうとしたが、少女の言葉によつて遮られ、しかもそれは男では無くムラクモに向けての発言だった。

（「確かにそうだな。なら、今回は運が悪かったってことで見逃してやってくれ」）

「『運が悪かった』……ね。じゃあ、代わりに貴方が相手してくれない？　一度抜きそうになった所を止められて、こっちはスッキリしないの。それに——」

少女はそこで言葉を区切り、背中の大太刀を一気に抜くと同時にムラクモに斬り掛かった。

それを、ムラクモはバックステップで躲すと同時に刀を取った。

抜刀が速すぎた為か、後ろにいた男の前髪がバツサリと切られ、触れてもいないのに切られたことに恐怖したのか、二人は顔を真っ

青にして退散していった。

どうでもいいことだが……。

「貴方には興味があるの。その力、見せて頂戴？」

「ムラクモ！ 大丈夫！？」

『——』

様子を見ていたキャシーは、少女が抜刀した所でムラクモの危険を感じ、駆け寄って来た。

「貴方、さつきも、今みたいに声を出さずに喋っていたわね？ どうして声を出さないの？」

（「『出さない』んじゃないくて、『出せない』の。ま、原因は分かんが、声が出なくなってな……と、んなことはどうでもいいな。さて、始めようぜ？」）

「（声が出せなくなる？ 精神的なショックか何かが原因かしら？）そうね。でも、その前聞きたいことがあるのだけど、いい？」

少女は自分なりに声が出せなくなる原因を考え、そのことについて何か心当たりがあるのかムラクモに質問することにした。

（「なんだ？」）

「声が出せなくなったのは、いつから？ それと、その時何かショックなことが起きたりした？」

（「声が出なくなったのは十年前。ショックなことつつたら、目の前で親父とお袋が殺されたことかな？ それがどうかしたか？」）

後ろで見ているキャシーは、ムラクモの体に隠れていることもありその文字を読むことは出来なかったが、今はそれで良かったのかも知れない。

「『どうかしたか？』って……まあ、いいわ。誰に殺されたのか、それも教えてもらえるかしら？　もちろん無理にとは言わないわ」

少女は初対面の人間にそこまで教えないだろうと思いつつも聞いたが、ムラクモはあっさり、「魔物だよ」と答えた。

「魔物？」

多少驚きながら、少女は復唱する。

（「そ。夜、いきなり魔物が押し寄せてきてな？　そいつらにガブリと。俺はノアのおかげで生き残ることが出来たんだよ」）

「……………」

（「どうした？」）

急に黙った少女にムラクモは問いかけた。だが、下を向いているのでその文字列は見えていない。

ムラクモもキャシーも、黙り込む少女を暫く何もせず見ていた。

やがて少女は顔を上げた。

「いいわ。始めましょう」

そして、大太刀・ドラゴンキラーを構えた。

ムラクモはキャシーに下がる様に言い、ノアを構えた。

お互いの準備が整ったことを確認した二人は、示し合わせたかのように同時に踏み込み、中央でぶつかり合った。甲高い音が辺りに響き、それによって周りの者は二人に注目し始め、その中には先程のムラクモの戦いを見ている者もいた。

瞬く間にその者等の口から広がっていき、野次馬は湧くようにどこからとも無く現れ、終いには街の殆どの人間がギルド前に集まってしまった。

「ちょ！ どいて！ 見えない！」

その人波に、小柄なキャシーはあっさり飲み込まれてしまい、ムラクモと少女の姿はすぐに見えなくなってしまった。

「フツ！ ハアツ！」

牙突から勢いを利用した回転斬りを放ち、それをどちらも躲したムラクモは一気に少女の懐に入り込み下からの斬り上げを繰り返した。顔を真上に向けて躲した少女は、そのまま体を後ろに回転させながら蹴りを放ち、ムラクモは顔を右に逸らして躲した。

綺麗にバク転をした少女は、右足が地に着くと同時に大太刀を構え、前傾姿勢のまま力強く地を蹴った。急接近した少女は横風に一闪し、ムラクモは屈んで躲したが、少女は空中にも関わらず、また

勢いを利用した回転から一撃を繰り出した。

ノアで防御したムラクモは、右手を堅く握り立ち上がる勢いをそのままに少女の鳩尾に向けて拳を放ったが、

「甘いわよ！」

大太刀から手を離し、少女はそれを受け止めた。

だが、完全に威力を殺すことは出来なかったのか、受け止めた瞬間痛みに顔を顰めた。

二人の戦いはそこから一時肉弾戦に移行した。

ムラクモはノアを使えば問題無いのだが、当たってしまえば間違はなく殺してしまうことは分かっている為、今は引っ込ませている。

至近距離での拳の繰り出し合いの中、一瞬の隙をお互に見つけられず大きな動きは出来ずにいるが、拳を繰り出す早さはどちらも尋常では無く、その動きを目で追うことが出来る者はこの場には二人を除いて存在していない。

「貴方、戦闘経験はどれくらいなの？」

（「十年位だよ」）

今はノアを出す余裕を持っている様で、ムラクモは動きを止めず文字列を作った。

器用な人間である。

「対人戦は？」

（「お前が二人目。そんなこと聞いてどうするんだ？」）
「いえ、なんとなく、よ！」

話している間に優勢に運ぼうとしたのかどうかは分からないが、少女は拳を屈んで避けながらムラクモに足払いをかけた。躲されることが分かっていた少女は、その隙に地面に刺したままにしていた大太刀を取り、距離を取る。そしてギルドの屋根に飛び移った。

「場所を変えましょう！ 人が多すぎて動きにくいわ！」

そう言うや否や、少女は街の南口に向かって屋根伝いに走っている、すぐに見えなくなった。かなりの速さで走っている様だ。

（あれだけ動いておいてよく言うよ）

心の中で悪態をついたムラクモは、自分の後ろに出来ている人だかりに突っ込み、

「あ、ムラクモ！ って、きゃっ！」

キャシーを抱きかかえて屋根に跳び少女の後を追った。

『舌嚙むからな。追いつくまでは喋らない方がよいぜ』

キャシーはおとなしく頷いた。

「この辺で良いかしらね」

街を出た後も少女は止まることなく走り続け、やがて街道と森以外何もない平原に出た所で止まり振り向いた。

『大丈夫だったか？』

「……うん」

お姫様抱っこが恥ずかしかったのか、やや間を置いて答えたキャシーを降ろし、ムラクモは再度ノアを出現させると、少女を見据える。言われることが分かっていたキャシーは、戦いの邪魔にならないようにムラクモから十分な距離を取った。

「ハッ！」

「はやっ——」

キャシーが離れたことを戦闘準備が整ったと解釈した少女は、十メートルはあった距離を一足飛びで詰め、先程までとは比べものにならない速さで大太刀を下から振り上げ、その余りの速さに、キャシーは驚きを隠せなかったが、ムラクモは慌てることなく綺麗に躲し、結果一瞬前までムラクモが立っていた場所から数十メートル後方まで大きな傷痕が残った。

相手がやっとな気を出したことにムラクモも気分が昂まり、少女の追撃が来る前に刀を振り下ろした。

「ッ！」

それを見た少女は、「殺される」と言う明確な未来が見え、生物

的本能に従い大太刀を離し一気に距離を取った。荒くなつた息を整えながら、体中に嫌な汗を掻いていることを実感しつつ瞬きを忘れムラクモを見ている。

（何よ、今の……心臓を直接握られた様な……嫌な感覚は？）

目の前に突き刺さっている大太刀を取ったムラクモは、それを少女の近くに向けて放り投げ、見事少女の目の前に刺さった。それを抜き少女はまた構えるが、まだ恐怖が残っておりその手は震え、大太刀はカタカタと音を鳴らしている。

たった一回の、それもほんの少しの本気の一撃に込められた殺気を受けた少女はすっかり萎縮してしまい、さっきまで威勢はどこへやらと言った感じで、その場から一步も動けずにいる。

遠目から見ていたキャシーも、少女の様子がおかしいことに気づき、一度ムラクモを見たが、当のムラクモは未だ刀を構えていることからこのまま続行することが分かり、結局何も言えないままだった。

少しして、次はムラクモが先に動きゆっくりと一步ずつ少女に向かって歩き始めた。

「あ……」

恐怖の余りか、まともに声を出すことも出来ず少女はただただ怯えその場に立ち尽くしていた。

一步一步確実に近づいてくるムラクモに、恐怖心は膨らんでいき、やがて手の震えは腕を伝って上半身に、そこから更に下半身に伝い、

結果少女の体はガクガクと揺れ始めた。何も出来ず、近づいてくるムラクモを眺め、遂にムラクモは少女との間合いを拳一つ分程までに詰めた。

大太刀を右手で退かし、少女の目を正面から見据えるムラクモに、少女はまた怯える。

この距離ならば、例えたった今剣を握った者でも外すことはない。

目の前の人間がそんなヘマをしないことを、さっきまで戦っていた少女はよく理解している。

そして、ムラクモはゆっくりと刀を握っている左手を上げた。

「あ……ああ……」

——殺される

そう確信した少女は堅く目を瞑り、その瞳から涙を流した。

「——え？」

だが、少女の体に刀が振り下ろされることは無く、代わりに感じたのは頭にポンと軽く何かが乗せられる感覚。

おそろおそろ目を開くと、目の前には穏やかな笑みを浮かべたムラクモがあり、刀が握られていた左手は少女の頭に伸びている。

そのことに、少女は自分でも分からないがひどく安心し、ペタリと座り込んで声を上げながら泣いた。

ムラクモもそのまま腰を下ろし、泣きじゃくる少女の頭をそっと撫でる。

その様子を見ていたキャシーは、戦いが終わったことを理解し走ってムラクモの元に向かい、隣に腰を下ろす。それを確認したムラクモは、少女に伝えたいことをキャシーに伝えて貰った。

「『殺される。そう思った時お前は怖かっただろう？ お前が今まで人を殺したことがあるのかは知らねえけど、殺したとしたら、そいつらも同じ気持ちを味わったんだぞ？ だからな、これからは人相手に剣を抜くことは余りするな。抜く時は自分も殺される覚悟を持って』、だつてさ」

未だ泣きじゃくっている少女にその言葉がどこまで通じたのか二人には分からなかったが、とりあえず泣きやむまでは一緒にいることにした。

第八話・ムラクモVS漆黒の少女（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第九話・出来る者の感覚、出来ない者の感覚

『まさかそのまま寝るとはな……』

「戦闘の疲れ、っていうよりは、泣き疲れたのかも知れないね？
見た目より、成長してる訳じゃないのかな？」

あの後、暫く待っていた二人だが、突然少女が静かになったことに疑問を持ち見ると少女は眠ってしまった。結果、大太刀を落下防止に背負い、その背中で少女はすやすやと寝息を立てており、今はレークナへの道をゆつくりと歩いている。

『ま、コイツよりもお前の方が年は下だろうけどな？』

「それとこれとは関係ないもん……そういえば、わたし何歳か言ってたっけ？」

『言っていないな』

「十四歳」

『おお。当たってたか』

「え？ 分かったの？」

『十四、五辺りかな、とは思ってた。あ、そういや、EXの下って何だ？』

その質問に一瞬首を傾げたキャシーだが、すぐにギルドのことと
分かり、トリプルエス「SSS」と答えた。そして、「その下に、ダブルエス『SS』『S』
『A』『G』まであるの」と、そう付け加えた。

『てことは、あの金髪は結構強かったんだな？』

「だからそう言ったでしょ？ まあ、確かにムラクモが最初から最後まで圧倒的だったけど……その衣装にすら掠ってなかったし」

キャシーのその言葉を聞いたムラクモは、感心した。

恐らく、あの場にいた殆どの人間がムラクモか金髪男の動きに夢中になっていたのであろう中で、そこまで細かく見ることは余り出来ないだろう。だが、キャシーはしっかりと見ていた。

（その目はいつか武器になるかもな……）

ムラクモはキャシーの成長が楽しみになった。

尤も、そんなに長く一緒にいるかどうかなど分からないが。

レークナへと戻ってきたムラクモ達だが、少女は未だに眠っており、仕方なくそのまま宿に向かった。空いていた大部屋を取り、ベッドに寝かせ、二人もそれぞれベッドに腰掛ける。

「中々起きないわね？ この娘」

『まあ、いいんじゃないか？ 俺達も、明日まではいる訳だしな』

「……………」

『どうした？』

急に黙り込んだキャシーにムラクモは問いかけ、キャシーは気になったことをムラクモに聞いた。

「ムラクモはさ、どうして会ったばかりの人に、自分のことを教えられるの？」

少女が戦う前に尋ねたことにも、始まりの森を抜けた後、キャシーに尋ねられたことにも、渋ることなくあっさりと答えた。ムラクモと出会い、まだ一日も経っていないが、冷静になって考えてみれば、聞かれたからと言って誰でも自分のことを教えてくれる訳では無い。

キャシー自身、素性は聞かれた所でおいそれと教える訳にはいかないのだから、尚更にそう思っている。

『？ 別に理由はねえよ。聞かれたから答えただけだ』

だが、ムラクモから返ってきた答えは、そんな単純な物だった。

「じゃあさ…… ムラクモの質問にわたしが答えなかったどうする？」

『答えたくないなら答えなくていいだろ？ どうしたんだ？』

「…………… ううん。何でもない」

『そうか？ ならいいが』

「あはは…… それで、この娘が目を覚ましたらどうするの？」

『別にどうもしねえよ。何をしようとコイツの自由だ。結果何が起きようとな』

一見冷たく聞こえるかも知れないが、少女自身がそう言ったことを知っているキャシーは納得した。

陽が沈み、外が完全な闇に包まれた頃、少女は漸く目を覚ました。

「…………… は？」

上体を起こし辺りを確認した少女は、今自分がいるここが宿だと言ったことを起き抜けの頭でなんとか理解したが、そうすると次は何故自分がここにいいのか、という疑問が浮かんでくる。

それを考えている時、足音が聞こえた少女は一気に意識が覚醒し側にあった大太刀を抜いた。

「——さかガルムがあんなに美味しくなるなん……」

「ハッ！」

「ヒッ！」

扉が開くと同時に天井を削りながら大太刀を振り下ろした少女だが、その剣はキャシーの後ろにいたムラクモによって簡単に止められた。

「あわわわわ」

余程怖かった様で、キャシーはムラクモに抱きつきガタガタと震えていた。

「貴方たち」

（「よ。元氣そうで何よりだ。とりあえず刀をしまってくれ」）

「あ、ええ。ごめんなさい」

言われた通り刀をしまった少女を確認し、ムラクモはキャシーの背を押しながら部屋に入り扉を閉めた。

「それで、どうして私はここにいるの？」

（「眠ったお前を運んできたからだよ。顔、洗ってきたらどうだ？目が赤いぞ？」）

「え？」

言われて少女は、目元に手を持って行き触れた所が少しヒリヒリ
することを感じた。

「私……泣いたのね」

そう独り言を呟いて、少女は洗面台のある浴場へ向かった。

（泣いたことがないみたいな言い方だったな……ま、いいか）

そう考えながら、ムラクモはキャシーの頭に手を置き、

「うつ……怖かったあゝ」

ポンポンと、優しく叩いた。

「酷い顔」

姿写しに写った自分の顔を見て、少女はそう呟き、もう一度冷水
を顔に浴びせた。

「ふう。さて、これからどうしようかしらね」

幾分スッキリした頭でこれからのことを少女は考える。だが、特段考える必要も無く、少女はどこか適当な所に行くことを決めていた。

（今までずっとそうしていたんだから、これからも何も変わらない）

備えられている布を使い、顔を拭いた少女はムラクモ達の所に戻った。

（「お前、これからどうするんだ？」）

「どうもしないわよ。今まで通り、気の向くままに旅を続けるわ」「ずっとそうしてきたの？」

「ええ。十年前からね。＜マクトウェイ大陸＞から、道に沿って歩いていたら、ここに辿り着いたの」「へ……」

戻ってきた少女は、ベッドに腰掛け、何故か同じベッドで並んで座っている二人と会話をしている。その二人の内の一人、ムラクモに聞かれ答えた少女にキャシーがそう聞き、特に隠す必要も無いと思った少女はまた答える。

その話に、キャシーは殆ど外に出られなかったこともあり、大きな興味を示した。

「何か面白い所とかあった？」

「これと言って、そんな所は無かったわ。それに、あったとしても

十年前の＜終焉戦争＞で破壊されてたりする所が多いと思うわよ？」

「そっか……………残念だな」

（「終焉戦争ってなんだ？」）

「「は？」」

聞き慣れない単語が聞こえた所で疑問の声を上げたムラクモに、二人は「コイツ何言ってるんだ」と言う様な視線をぶつけた。

「終焉戦争のこと、知らないの？」

『ああ』

「十年前に起こった人と魔物の戦争よ？ 歴史にも刻まれてるのに」「んなこと言われてもな……………ずっとハイス村にいたんだから仕方ねえだろ？」

「あ、それもそっか……………じゃあ、簡単に説明するけど、いい？」

『ああ』

「ちよつと待って」

「——え？」

まさに説明しようとしていたキャシーは突然止められ少女を見た。ムラクモも少女を見る。

「貴女は彼の言っていることが分かるみたいだけど、私は口を動かしているようにしか見えないの。今彼はなんと言ったの？」

「あ、そっか。えっとね？ 『終焉戦争のことを、ずっと故郷にいて知らないから教えてくれ』って」

「成る程ね……………それで、どうして貴女は彼の言っていることが分かるの？ 声は出ないのよね？」

ムラクモは一つ頷いた。

「読唇術だよ。口の動きで、ムラクモが何を言ってるか分かるから、わたしはそれに返してるの」

「貴女……それがどれだけ難しいことか分かってるの？」

こともなげに言うキャシーに、少女は呆れたように言った。

「え？ そんなに難しくないよ？ やってみると結構簡単だし。貴女も……そういえば、貴女、名前なんて言うの？」

今更？ 二人は同時にそう思ったが、言うのも面倒だと思ったので言わなかった。

一つ溜息を付き、

「メルシアよ」

少女はそう名乗った。

「わたしはキャシー。よろしくね？ それで、メルシアもやってみる？」

「やるって……読唇術？」

「うん」

少女二人が話し始め、暇になったムラクモはベッドに寝転がり、またノアとじゃんけんをして遊んでいた。

「（まあ、暇潰しにはなるかしらね）ええ、やってみるわ」

「それじゃ、わたしが何か言ってみるからそれを当ててみて？」
「ええ」

（終焉戦争のことはどこに行ったんだろ？ まあ、いいが。さて、五回連続で勝った奴が勝ちだからな？ 気張って行くぞ？ じやんけん！ ポン！ あつ、くそ！）

「（ムラクモ）」
「『すあきや』？」

全く違う新たな言葉が生まれた。

ムラクモはそれを聞いた途端、吹き出しそうになったがなんとかこらえじやんけんを続行した。

「（いや）」
「『びやあ』」
「（かぜ）」
「『まえ』？」

やはり中々難しい様で、その後一時間程掛けてやっと正解したのが、

「『ムラクモ』？」
「あ、正解」

その言葉だった。

途中、ムラクモは笑いすぎたことで引きつけを起こし、これ以上部屋にしていると笑い死にしたい外に出た。

「やったね。じゃ、次行くよ?」

「ええ」

「（キャシー）」

「『きゃー』?」

「悲鳴じゃ無いんだから……。次ね、（ノア）」

「……『もあ』?」

「惜しい」

「ふう……やっぱり難しいわね。貴女、どうしてもこんなことが出来る様になつたの?」

「え? なんとなく、『出来るかな?』って思ってたやってみたら出来た」

「……………」

果たしてそんな簡単にできて良い物だろうか、とメルシアは疑問を感じずにはいらなかったが、あまり細かいことは気にしないことに決め、その後も読唇術の練習に励んだ。

（「終焉戦争」、ねえ……確かにハイス村は、名の通り終焉を迎えた訳だが……まあ、いいか。今更気にした所で何が変わる訳でもねえし）

宿の外に出ていたムラクモはそんなことを思いながら空を見上げた。

ハイス村では、上空に遮る物など存在せず煌めく星々を眺めるこ

とが出来たが、レークナは建物が建ち並んでいて見える空の範囲に限られている。そのことに不満を感じたムラクモは屋根の上から見ることにして、宿の屋根に跳んだ。

（やっぱ空つてのはどこで見ても綺麗だな……）

組んだ手を頭の下に回し、寝そべって空を見上げるムラクモ。

陽が既に落ちているからなのか、人の姿は殆ど見当たらない。

（いたら怪しいと思うが。そういや、角の加工終わってんのかな？）

金髪男と戦った後、ムラクモとキャシーの二人はワイバーンの角を加工して貰う為武器屋へと赴き、店主に見せた所、「明日まで掛かる」と言われ、明日まではここレークナに滞在することを余儀なくされたが、もしかしたらもう終わっているのではないかと思い、行ってみることにした。

屋根を伝いながら武器屋の屋根まで行って下に降り、灯りが点いていることを確認したムラクモは中に入った。

「ん？ おお、朝の兄ちゃんか。丁度良かった、さっき角の加工が終わってな……持ってくるから少し待ってろ」

白髪に眼鏡を付け、作業着を着た人の良さそうなおじさんは、ムラクモを見るとそれだけで用件を理解し、そう言っただけで奥へと消えた。

戻ってくるまでの数分、改めて中を見回したムラクモはどの武器も優れていることに感心していた。

武器に詳しいという訳では無いが、どの武器にも何かしらの想いが込められていることが分かる。

（中々いねえだろうな……ここまで一つのことに打ち込める奴つてのは）

「待たせたな」

そう思っていると、おじさんが戻ってきた。持っている小さな木箱の蓋は開けられており、中には刀身の青い短刀と、黒に黄色い紋様が入った鞘が入っている。

（角ってあんな色じゃ無かったけどな……）

「ワイバーンの角はな、熱すると青くなるんだ。どんな原理かは分からんがな。名前は『スカイブルー』と付けたが、良かったか？」

角を持ってきた時に代金を払っていたムラクモは、頷きながら鞘と短刀受け取り、感謝の意を込め頭を下げた。

「……声が出ないということは、この先苦労することが多いだろうが、一人じゃないんだからな……仲間には頼って良いんだ。まだまだ先は長い、思う存分楽しめよ？」

そして、頭を上げたムラクモにおじさんは拳を突き出した。

ムラクモも拳を突き出し、ゴツンと痛そうな音を響かせながら互いの拳をぶつけた。

腰の帯に、スカイブルーを差し、「そろそろ練習も終わっている

だろう」と思いながらムラクモは宿に戻ったが、部屋の前に来た時に、「しえい?」、とメルシアの意味不明な単語が聞こえ、まだ練習をしていることが分かった。

メルシアは暇潰しのつもりが、かなり夢中になっている様だ。

出来るだけ邪魔にならないように、扉をそっと開き中に入ると、何か言おうとしていたキャシーが動きを止め、ムラクモの名を呼んだ。それにより、メルシアも気付いたが、その目はまるで、「邪魔するな」とでも言っている様だ。

「邪魔しないでちょうだい」

というか実際に言っていた。

『悪いな』

「『まぶいわ』?」

「惜しい!」

(そうか?)

この短時間の間に癖になってしまったのか、メルシアはムラクモの口の動きを見て言った。ムラクモもそれを分かって、ノアでは無く口を使ったのだが。

「あら? 腰の帯に差してるそれ、どうしたの?」

「あ、ホントだ。拾ったの?」

『んな訳ねえだろ……ワイバーンの角を加工した奴だよ。さつき行ったら、もう出来てたんでな、受け取って来た。名前は『スカイブル』だ』

「へ〜……」

「何を言ったか全く分からなかったわ」

抜きながら説明し、キャシーは刀身を見て感嘆の声を洩らし、メルシアは全く分からなかったことを悔しく思っていた。

『お前達、風呂は済ませたのか?』

「あ、ううん。まだ。ずっと練習してたから」

「む……分からない……」

「なら、さっさと入れ」、と言って、ムラクモはベッドに寝転がった。キャシーは素直に返事をし、当然の様にメルシアの手を掴み浴場へと向かった。

「ちょ、キャシー、どうして私を引っ張っていくの?」

「お風呂でも練習するからに決まってるでしょ? それに、誰かと一緒にお風呂入ったことって無いんだ、わたし」

「だから何よ?」

「まあまあ、良いじゃない。スキンシップだよ、スキンシップ」

楽しそうに手を引き、キャシーはメルシアを浴場まで連行していった。

「メルシア、肌綺麗だね? どんなお手入れしてるの?」

「何もしないわよ。体のことなんて何も気にしてないから」

「いいなあ……」

「それで? どうして広いお風呂の中で、並んで入っているのかしら?」

この宿のお風呂は、小部屋と大部屋で大きさは違うが、その差が

激しい。小部屋では精々二人が同時に入るのが限界だが、大部屋では五人程は余裕で入ることが出来る。その広い風呂の中で、何故かキャシーはメルシアにピッタリくっついていてる。

今の質問はそれについてのことだが、

「え？ なんとなく」

キャシーはそう答えた。

「……そう」

「うん。さ、練習始めようか？」

「ええ」

それから二人はまた読唇術の練習に励んだが、

「うあゝ……のぼせた」

キャシーがダウンしたことにより強制中断となった。

「はあ」

浴場にメルシアの溜息がやけに大きく響いた。

第九話・出来る者の感覚、出来ない者の感覚（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第十話・キャラルの過去

終焉戦争、十年前世界各地で突如として起こった魔物の暴走を発端として始まった人と魔物の戦争。兵器を騎士共に総動員し、各地で壮絶な戦いが繰り広げられた。戦いは十日程で終わったが、その終わり方に疑問を持っている者は多数いる。世界貴族の者達は皆そうだ。何せ、始まった時と同じように突如魔物が大人しくなりそれぞれの住み処へと戻ったのだから、当たり前だろう。だが、戦いの傷痕は今尚痛々しく残っており、結果としてこの戦争は、＜終焉戦争＞と名付けられ歴史に刻まれたのは、まだ民の記憶に新しい。

現在、ムラクモ、キャシー、メルシアの三人はデイロウアに向けて昨日ムラクモとメルシアが戦った街道を時々襲撃してくる魔物を倒していきながら歩いている。その途中、読唇術の練習をしていたキャシーが突然、昨日ムラクモに終焉戦争のことを話していないことを思い出し、説明したのが上記のことである。

その間も魔物は来たが、ノアが全て倒し収納した。

「簡単に言えばこんな感じ」

「ついでに少し付け加えるなら、最近は魔物の暴走が『人為的に起こされたモノではないか？』っていう仮説も立てられてるわ」

「え……そうなの？」

「あくまで仮説よ」

メルシアの言ったことは、まだまだほんの一部で囁かれているだけであり噂の域を出ないが、数人の耳には既に入っているだろう。事実として、メルシアはそのことを知っている。

「でも、そんなことが出来る人がいるとしたら、どうしてそんなことしたんだろう?。」

「さあね」

ちなみにメルシアがいる理由は単に、「読唇術をマスターしないと気が済まない」と言う意地の様な物だが、諦めないことは大切なことだ。

「ただ……貴方に少し聞きたいのだけど、本当にそんな人がいるなら、貴方はどうする?。」

少し後ろを歩いているムラクモに、メルシアは突然尋ね、キャシ―もムラクモを見た。

『どうもしねえよ。興味も無い』

「え?。」

「なんて言ったの?。」

まだ少しの単語しか分からないメルシアは、キャシ―からムラクモの答えを聞いて歩みを止め、

「——憎くないの?。」

振り返りつつそう尋ねた。

(「最初は憎んだ。恨みもした。でもな……結局何が変わる訳でも

ない」)

「じゃあ、その人が実在していて、もし『目の前に現れたら』どうする?」

(「一発殴らせてくれたらそれでいいさ」)

練習を続けろ、と言ってムラクモはこの話を終わりにし、右手を左の袖に、左手を右の袖に入れて歩き始めた。

「……………」

「どうしたの?」

その背をじっと見つめていたメルシアにキャシーは聞いたが、

「いいえ、何でもないわ。続けましょう」

「? うん」

そう答え、メルシアも歩き始めた。その後をキャシーも追いかけて、引き続き読唇術の練習を始める。

「(レークナ)」

「『えーくや』?」

「あ、近い」

(そうか?)

その後半日掛けて、レークナとディロウアの間地点である巨大橋に到着した一行だが、そこには人だかりが出来ており、足を止めることとなった。

「邪魔ね……………」

「ムラクモが『斬ろうとするなよ』、だつて」

「しないわよそんなこと（ちゃんと聞こえてたんだから）」

その会話が聞こえていたのか、旅の行商人の様なおじさんが三人に、デイロウアに行こうとしているのかを聞いてきた。その問いに、キャシーとメルシアは頷き、ムラクモは空を眺めていた。

（腹減った……）

そしてそんなことを考えていた。

「この人ばかりはなに？」

「ああ、橋が壊れてるんだよ。何とかすれば通ることは出来るかも知れないけどね……危険過ぎるから誰も通ろうとしならしい」

「まあ、そうだよね……」

「通ろうとする奴がいたら只の馬鹿よ。それで、デイロウアに行くなら、＜神の泉＞から＜コマナシ＞に行つて迂回するしかないのかしら？」

「そうなるね。ただ、それにしても問題がある訳だが……つて、せめて話は最後まで聞いてくれないかな？」

二人は、おじさんの言つた、そうなるね、辺りで既に来た道を戻つており、後をムラクモもゆつくりと追っていた。

（「それで、あのおっさんが言つてた問題つて何だ？」）

「これも終焉戦争と関係あることだけどね……戦争以降、神の泉は、『飲んだ者の体を癒す』という効果を失ってしまったの。なんでも、その『泉を護っている者が穢れたから』、らしいけど」

「その護っている者も魔物なんだけど、確固とした自我を持つてる

の……名前は<ウーティ>。討伐ランクはA〽Sよ」

（穢れた、ねえ……それで、自我を持つてゐることは、十年近く苦しんでゐることか？ 俺だと耐えられねえな、それは）

文字列が出ないことを、ムラクモが理解したと判断したのか、二人はまた読唇術の練習を始めた。

それからまた半日ほど掛けて、三人はレークナ付近へと戻ってきたが、そこでまたも足を止めることになってしまった。

「『よな』？ て、キャシー？」

正確には、足を止めたのはキャシーだけだが、つられて二人も足を止めた。キャシーはメルシアの呼びかけにも応じず、ずっと街の出口を見ていた。そこには、鎧を着た騎士が五人程おり、道行く人に何かを聞いていた。

ボウツとしているキャシーの目の前でメルシアは手を振るが、それでも反応を示さず、今度はムラクモが頭の上に手をポンと置いた。すると、

「はっ」

戻ってきた。

「どうかしたの？」

「あ、ううん。何でもない」

（「あの騎士達か？」）

キャシーが見ていたのは、あの騎士たちだろうと思い、ムラクモがそう聞くとキャシーは凶星を突かれたことで何も言えなくなった。

「そこのお三方、少し聞きたいことがあるのだが、構わないだろうか？」

そんなキャシーを見ていると、五人の中から三人程がムラクモ達に近づき、先頭にいる男性騎士がそう聞いた。その問いにメルシアが首を縦に振り、それを確認すると男性騎士は、「この辺りで王女様を見ていないか」と聞いてきた。

「王女様？ ああ、スレイジア家の？」

「そうです。実は一昨日の夜、キャロル様が城を抜け出したので、一応聞いて回っているんですが……」

「一応って、どういうことかしら？ いなくなったのは王女なんですよ？」

普通、一国の王女が城から姿を消す様なことが起きたなら、王はすぐに搜索を開始させ、騎士達は血眼になって探す筈だ。だが、騎士の言い方からしてそんな様子は無い。

「それは私がご説明したいのですが、よろしいですか？ 隊長？」

「ん？ ああ、そうだな。頼む」

後ろに控えていた蒼髪の女性騎士が隊長に許可を取り、前に出て説明を始めた。

「あ」

「え？」

「っ」

その女性騎士を見た途端、キャシーは声を上げそれに気付いた騎士が見たが、キャシーは「しまった」と言うような顔をしてすぐにムラクモの背に隠れ顔だけを出した。

「何か？」

「いえ、気にしないで頂戴。それで、どういうことかしら？」

「あ、はい。まずは、キャロル様の過去をお話することになります。が、よろしいですか？」

頷いたムラクモとメルシアを見て女性騎士は、王女、キャロル「ド」スレイジアについて話始めた。

十年前のある日、キャロルは宝物庫に向かうと言った王について行くと言いだし、手を離さない様にと約束した上で共に宝物庫に向かった。宝物庫に向かった理由は、ある探し物をする為。到着したキャロルと王は共に中に入り、王は近辺の物に触れない様に言い聞かせ探し物を始めたが、何分長い間放置されていただけに、どこに何があるのかは分からなくなっていた。宝物庫と言っても、そこにあるのは魔導書が殆どであり、金銀財宝があると言うわけでは無いが、仮にあつたとしても魔導書に比べれば大した価値がある物では無くなる。それほど、スレイジア城に納められている魔導書は価値があり、同時に危険な物であつた。

王が探し物をしているその間、暇になったキャラルは中の物を見物していたが、まだ幼い為何が何なのかを理解することは出来なかった。

それから暫くして、キャラルの背後に何かが落ちた音がし、驚きながら振り向くとそこには一冊の魔導書が落ちていた。その魔導書こそが、王の探していた物なのだが、何を探しているのかすら聞いていなかったキャラルにそんなことが分かる筈もなく、その魔導書に近づいた。見上げると、そこには丁度一冊分が入りそうな空きがあり、キャラルはなんとかしてそこに戻そうと思い、魔導書を拾う為屈んだ。

王はそこで別の所を探そうと、探していた本棚とは別の本棚を見たのだが、そこで娘が何かに触ろうとしているのを見た。

それを見た王は血相を変え娘の名を叫んだが、既に娘は魔導書に触れてしまっていた。

途端、魔導書から闇のManaが溢れ出し、キャラルを包み、王は慌てながらも光のManaを手に集め魔導書を払い、同時にキャラルは気絶した。

娘の一大事に慌てるなど言う方が無理だが、その時の王は余程慌てていたのだろう。愛娘に何度も呼びかけ、そのことに夢中になっていた所為で娘の中に入り込んだ闇のManaを見逃してしまった。

それから、キャラルは一週間ほど目を覚ますことは無く、王はその間自分を責め続け、王妃の慰めの言葉も耳に入らない状態となっ

てしまった。

「加えて、私たちも王女様のことが気がかりで、訓練にも身が入らなくなっていました」

「王女様の所為、みたいな言い方になってしまいが、事実でな。皆、王女様が大好きなんだ」

隊長の言葉に、女性騎士と後ろにいるもう一人の騎士は深く頷いた。

「それで、王女様はその後どうなったの？」

「目は覚ましましたが、魔導書のマナに触れたショックが大きかったのか、それまでの一切の記憶が消えてしまいました」

「……………」

その言葉を聞き、メルシアは何も言えなくなり、キャシーは黙り込み、ムラクモの着物を強く握っていた。

「加えて、本来ならマナと髪や目の色に関係はありませんが、マナがあまりに強すぎたのか左目が黒くなってしまったのです。それが何か影響を与えた、と言う訳では無いのですが、これから何か起こるのでは無いかという懸念があります」

「そう。それから、王女様はどう生活していたの？ 両親の顔も、貴方達騎士のこととも全て忘れて……待って、消えた？ 忘れたのでは無くて？」

言っている途中で、今更ながらメルシアはそのことに疑問を抱い

た。

「そうです。文字通り、一切の記憶が消えてしまいました。貴女が言うように、王様と王妃様、私たちのこと、そして自分のことも……全て」

（少し俺と似てるな。違うのは記憶って点だが、その場合辛いのは忘れた方より忘れられた方）

「それから、王女様が自分達の娘であることを、お二方は教えてください。王女様も、やはり相手をご両親だった為か、恐怖心などはあまり無かったのかも知れません」

これが以前言った、「キャロルにとって、王族であることは当たり前ではない」ということである。

それから、王と王妃は可能な限りキャロルを自由に生活させることにした。だからと言って、それまでが不自由だったと言う訳では無く、外出する際は二人も一緒だった。以前も言ったが、スレイジア家は最下位に属している貴族であるため、厳しい家庭環境と言う訳では無い。いや、例えば上位に属していたとしてもスレイジア家は厳しくはなっていないだろう。

そんな両親の、新たな方針の下、キャロルは自由に生活を始めたが変わった点と言えば、見る物全てに興味を抱くようになったことだろう。他のことは殆ど変わっていなかった。世界のことや魔物のこと、剣術に興味を示し、中でも特に興味を示したのが外の世界のことであった。記憶が消える前にした遠出と言えば、ライドメイル大陸で行われるパーティ位であった為、一度も出ていないことと同義だった。

だが、やはり危険と言うことで街の外に出ることは出来なかった。

それを補うかの様に、剣術の練習に励み、騎士達の動きを真似て我流剣術を磨いていった。

「それから三ヶ月程が経過し、終焉戦争が始まりました。王国でも甚大な被害が出てしまいましたが、王女様達は城内の結界に護られていたので、無事だったのです」

その後、キャロルは只護られるだけだったことに不甲斐なさを感じ自分の力で何かを護りたいと思うようになり、以前にも増して剣術に打ち込む様になった。

「それからの王女様の成長には、目を見張る物がありました。騎士相手に戦い負けたことは殆どありません」

「手加減をした、とかではなくて？」

「したつもりはありませんが、やはりどこかで抜いてしまっていた所はあったかも知れません」

（ん？）

女性騎士がそう言った時、ムラクモはキャシーの手に更に力が込められたのを感じた。

（まあ、いいか）

だが、あまり気にしないことにした。

「それで、何があつたか知らないけど、王女様は一昨日城を抜け出したのね？」

「そうです。王女様が外の世界に強い憧れを持っておられることは皆が知っていたので、形だけでも搜索をするように、と王様から命じられているのです」

（だから、一応か）

「成る程ね……それじゃあ、見つけたら知らせた方が良いかしら？」

「そうですね。念の為、王女様の特徴を覚えておきます」

腰元まである銀髪に青い右目と黒い左目。身長は百四十？程、そして腰には宝刀であるシュヴァイスを提げている。

それが、王女・キャロルド＝スレイジアの特徴だった。

騎士達と別れた三人は、改めて中間地点である神の泉に向けて出発した。

途中、両親と城の者達の思いを知ったキャシーは、皆に感謝した。

（やっぱり親なんだ……ありがとう、お父さん、お母さん。わたし、世界の隅々まで行ってくるよ）

そして、そう決意した。

「さて！ 練習、頑張つて行くよ！ メルシア！」

「いきなり何よ？ まあ、いいけど」

まずは読唇術をメルシアに教えることを頑張ろうと決め、気合いを入れて言うキャシーに溜息を付きながらも、メルシアは練習を始めた。

後ろを歩きながら、ムラクモは泉を護っている魔物のことが気になっっていた。

（穢れたってことは、正気を失ったりしてんのかな？ 倒して元に戻ると良いが、他にも魔物がいるだろうし、結構面倒な戦いになるかもな……旅に出て早々ワイバーンに遭遇したり、金髪と戦ったり、メルシアに喧嘩売られたり……こんだけ色々あって、その泉だけ何も起きないなんてことはないよなあ）

ムラクモは空を眺めながら溜息を付き、また視線を前の二人に戻した。

「『ひゃーふ』？」

そして、また吹き出しそうになった。

翌日。

その日は朝から雨が降っていた。昨日まではそんな気配すら無く、突然の雨だった為、キャシーとメルシアはムラクモの両サイドにくっつき、三人でノアの下に入っている。

「貴方のお母さん……不思議な力を持っていたのね？」

『そうだな』

「あ、『そう』は分かった」

「お、すごい」

「ん」

ムラクモは、キャシーにする時と同じようにそっとメルシアの頭を撫でた。

（いいなあ）

キャシーはそう思っているが、メルシアは何か不満なのか顰め面をしていた。そして、ムラクモに少し屈む様に言い、耳元で

「もつと乱暴にしてくれない？」

（乱暴？）

それを聞き、姿勢を戻したムラクモはメルシアの頭をがっちり掴みギリギリと力を入れた。

「ちょ、何してるの！ ムラクモ！」

『いや、こいつが乱暴にしてくれて言うから』

それを見たキャシーはそう言ったが、ムラクモは力を緩めずにメルシアの頭を掴んでいた。

「ああ！ もつとお！」

掴まれているメルシアは、いやがる所か喜んでおり、キャシーはどういう反応をすれば良いのか分からないように、言葉を失ってい

た。

『キャシー、世の中には色んな奴がいるんだよ』

「うん……そうみたいだね」

この日、キャシーは新たな知識を得た。

「ああん！ もつとお！」

（なんか、普段のお袋と手紙のお袋みたいだな……）

用は普段との違いがありすぎる、ということである。

第十話・キャロルの過去（後書き）

指摘・批判・批評・誤字脱字報告、お待ちしております。

第十一話・神の泉を護る者

泉に近づくにつれて雨は勢いを増して行き、今はまともに前を見ることが出来なくなっていた。

「やっぱり……ウーティが原因なのかな？」

「そう考えるのが妥当ね。あら、どうやら到着したみたいよ？」

メルシアがそう言い、ムラクモとキャシーも目を凝らして前を見るとそこには黒い泉があり、周りには大量の魔物達がいた。

「この雨の中で戦うのは危険だけど、通らなければいけない以上は戦うしかないわね」

そう言いながら大太刀に手を掛いつでも抜刀出来るようにメルシアは構え、ムラクモも既に刀を手に使っていた。キャシーもシュヴァイスに手を掛、構えた。

ムラクモは二人に目配せし、先に行くことを伝えると同時に駆けだした。

「ガア！」

五体のヘルガラムがムラクモの姿に気付き吠えたが、その時には既に遅くムラクモは刀を振るっていた。最期の上を上げるまもなく

絶命した五体はノアに呑み込まれ、それを見た辺りの魔物達は警戒を強くした。

キャシーとメルシアもそれに続き、雨の中の戦闘が始まった。

「キャシー、後ろ！ そのまま振り払って！」

「うん！ メルシアも、左右から来てるよ！」

「ええ！」

メルシアはキャシーの、キャシーはメルシアの目の届いていない所をカバーし合いながら戦っていた。

キャシーは言われた通り体を後ろに回転させると同時にシュヴァイスを振り、襲いかかってきていたガルムを斬り裂き、メルシアも同じようにその場で回転し左右から来ていたラビ達を斬り裂いた。更にその勢いを活かし、上空から来ていたガルムを下からの振り上げで両断する。

そうして、敵を倒した二人だが、最初の一体を斬った時から何か違和感を感じていた。

（ここに来るまでに戦ったガルム達よりも強い？）

（変ね。こここの魔物達、周囲の魔物とはレベルが違う）

「メルシア、気付いてると思うけど」

「ええ。泉の影響、ね！」

お互い背中合わせの状態になり、違和感のことをキャシーが言うと、同じことを感じていたメルシアは魔物を斬り伏せながら答えを

言った。

「でも、ムラクモはいつもと変わらないね？」

（「なにも違う所なんてないだろ？」）

会話の聞こえていたムラクモはノアでそう文字列を作りながらも辺りの魔物達を次々と倒して行っており、それを見たメルシアが呆れた様に溜息を付いたがすぐに気持ちを切り替え魔物の討伐を再開した。

「それにしても……どこからこんなに湧いてくるのかしら？」

「もしかして、森中の魔物が来るとか？」

（そういうこと言うと、ホントにその通りになるから不思議だよな……）

ムラクモがそう思うと同時に、森の四方八方から一斉に魔物達が登場ムラクモ達に襲いかかった。

「うそ」

「いい加減にして欲しいわね」

（じゃ、一掃するか）

そう決めたムラクモはノアを全方位に展開させ、魔物達を一体残らず倒した。

「……………」

「……………」

その光景を見た二人は何も言えなくなり、その場に立ち尽くしていたが、次の瞬間泉の中央から蒼い服を着た女性が飛び出してきた

ことにより現実に戻された。

（お出ましか）

その女性はムラクモの前に立ち、水の剣を作り出し予備動作も無く斬り掛かったが、ムラクモはそれを受け止めた。

「ウーティ！」

女性の姿を確認したキャシーがその名を叫んだ。だが、ウーティはムラクモだけに集中している様子で、キャシー達の方は見向きもしなかった。

——助けて

ウーティの剣とぶつかった瞬間、ムラクモはその声を聞いた。それは紛れもなくウーティのものであることが、ムラクモは理解することが出来、

『初端からそのつもりだよ。待つてろ。楽にしてやるから』

相手に伝わらないことを承知の上で、そう言った。

（「お前達は魔物を頼む。コイツは俺がやる」）

ムラクモはキャシーとメルシアにそう伝え、ウーティとの戦いに

集中した。

剣を弾き、右袈沙斬りを繰り出したが、ウーティは一步下がって
躲し水の剣を左手にも作りだし二刀流となり反撃を始めた。

回転斬りから両腕を交差させて振り上げた状態から斜め十字に斬
り、更に左での突きを放つ。ムラクモはそれらを全て躲し、剣を粉
砕する為ウーティが持つ左の剣を打ち砕いた。

だが、水属性の上級魔物であるウーティは、大気中に存在する水
のマナを集めいくらかでも剣を作り出すことが出来る。その力によつ
て、すぐに左の剣は復活した。

『厄介だな』

悪態をつきながら、また剣を砕こうとするが、ウーティもそう来
ることは分かっていた様で、躲すのでは無く突っ込んだ。一気に自
分の有利な状態に持つて行く為だ。

左右からの連続斬りに体術を織り交ぜ、更には降っている雨まで
も操り、様々な攻撃を繰り出す様になったウーティに対し、ムラク
モも二本の刀を使い、ノアにスカイブルーを使わせて応戦した。

泉には何度も何度も甲高い音と尚勢いを増し続ける雨の音が響い
ていた。

人と魔物の血で穢れてしまった泉と、その泉を護るウーティ。

飲んだ者の体を癒すと言われる効果を持つ水はその効果の一切を

失い、全く逆の効果を飲んだ者に与えることになってしまった。

「飲んだ者の体を蝕む」と言う効果を……。

だが、その時泉の色は正常であり誰も異常がある等と考えもしなかった。

周りには魔物や兵士の死体があつたが、それらはここに辿り着いた所で力尽きた、もしくは衰弱していた状態で魔物との戦闘になつてしまい、相打ちとなつたのかと思う者が多かった。

だが、ある時三人の兵士が、隊長の命で水を汲みに泉に向かった。

泉に着いた三人は、周りにある兵士の死体に黙祷を捧げ、水を汲んだ。

帰ろうとした所で、喉が渴いていた一人の兵士が泉の水を飲み、それを見た二人は笑いながら、後で飲めよと言つたが、飲んだ兵士の様子が可笑しいことに気付き笑みを止めた。

近寄つて声を掛けると、兵士は少し遅れて反応したが、顔色が異常な程悪くなつており、まともに立つことすら出来なくなつてしまい、その日の夜に死んでしまった。

全くの健康体であつたにも関わらず、その兵士は命を失い、他にも何人もの兵士が命を失つた。

一緒に水を汲みに行つた三人の内二人が死んでしまい、残つた一人が泉に原因があるのではないかと疑問を持ち、その翌日他の兵士も共に泉に向かった。

その時ウーティは、これ以上人が近づかない様にしようと外に出
ていたが、運悪くそこで兵士達が来てしまった。

言葉の通じない種族が会ってしまえば、結局戦うことになって
しまい、ウーティは自分の所為ではないことをなんとか伝えようと
したが、兵士達はそんなウーティに構わず攻撃を仕掛けた。

——助けたかっただけなのに………人も魔物も、何も聞いて
くれなかった。わたしが悪いんだって、決めつけて、何度も何度も
泉を荒らされて………沢山血を浴びて………泉もわたしも穢れてしまっ
た。もう、これ以上は、自分を抑えることが出来ない。だから、お
願い。わたしを消して

ウーティの瞳からは、涙が止め処なく溢れていた。

『ふざけんな。消してたまるかよ。言っただろ、元より助けるつも
りだって………』

そう言った瞬間、ウーティはムラクモから離れ、泉の中へと飛び込んだ。ムラクモもノアを球状にし、泉に飛び込む。

「まずいわね。水の中じゃ、ウーティは無敵よ」

ウーティの討伐ランクが高い理由は、もちろんその強さにもあるが、真の驚異はテリトリーである泉の中から繰り出される攻撃にある。泉の水全てを操り出される多種多様な攻撃により、どんな手練れの戦士は魔術師だろうとその攻撃を完全に防ぐことは出来ない。加えて、それまでにどれだけのダメージを与えていたとしても泉の中に入られてしまえば回復する。

だが、本来ウーティは好戦的な魔物ではなく、この討伐ランクは戦争以降付けられた物だ。

今、ウーティは水の中にいる。それがどれだけムラクモにとって不利なのか、メルシアはそのことをよく理解していた。

「大丈夫だよ」

「え？」

だが、同じように見ていたキャシーは、そんなメルシアの心配など気にせずそう言った。顔には笑みさえ浮かべている。

「ねえ、メルシアはムラクモのギルドランク、知ってたっけ？」

そして視線は、ムラクモに向けながら突然聞いた。メルシアは首を横に振るが、ウーティと互角に戦っていることから高ランクだろうと思っていた。

「Fだよ」

「嘘ね」

聞いた瞬間、メルシアは否定した。キャシーも、概ね思った通りの反応が返ってきたことに苦笑しながらも、「本当だよ」と言った。

「メルシアが、ムラクモと金髪男の勝負を見ていたのか分からないけど、相手はBランクだったの。でも、ムラクモは圧勝した」

「それは私も見ていたわ。でも、彼はAランクの私にも勝ったのよ？ それなのに『F』？ 冗談にしか聞こえない」

「私だつてそうだったよ。見てた訳じゃないけど、ムラクモはワイバーンすら一瞬で倒した。それなのに、カードに表示されたランクは間違いなく『F』」

メルシアのランクがAだということに驚きながらも、キャシーはそう言った。

「でも、戦ったメルシアは良く分かってるんじゃない？ ムラクモの強さ」

「それは……」

そう言われると、メルシアは何も言えなくなった。

「ね？ だから今は、信じて待とう？」

キャシーは屈託無く笑いながらメルシアに言った。

「はあ……分かったわよ」

観念したのか溜息を付きながら、メルシアはそう言った。

水の中に入ったムラクモは、底にノアをのばして刺し引つ張られる形で一気に潜った。目の前には二本の剣を持ったウーティがあり、周りには泉の水で作ったと思しき剣が数十本は浮いていた。

それらは、水の色と同化しており目視することは難しいが、ムラクモにとっては特に関係のないことだ。

（「こい」）

瞬間、全ての剣がムラクモに向けて放たれたが、高速回転したノアが全て弾きそれを防ぐ。

その回転の影響を受け、泉がムラクモを中心に渦を巻き始め、次第に水は竜巻となり上空に昇っていきウーティの隠れる場所は一切無くなった。竜巻の中なら入ることが出来るだろうが、いくらウーティと言えど高速回転する水の中では自由に動けない。

「ちょ、何よこれ!？」

「ムラクモ、こんなことも出来るんだ……なんか、あれだね？　ついさっき言っておいてなんだけど、Fとは思えないね？」

また苦笑しながら言うキャシーを見て、メルシアもまた溜息を付いた。

（さて、そろそろ終いにしようぜ？）

まるでその思いが分かった様に、ウーティは竜巻と化している水を無理矢理操り、降っている雨も交えて巨大な水球を作り出した。

（来るか）

ムラクモはノアを刀に戻し、迎撃体勢を取る。

その間にもウーティは水球を巨大にしていき、それが直径二十メートルを超えた辺りで一気に凝縮し始めた。それは掌程の大きさとなり、ウーティは前に尽きだした両手の中央にその水球を構えた。

「ちょっと……あんなの、喰らっても避けてもどの道辺りは無事じゃ済まないわよ」

『お前等。一応離れとけよ？』

「メルシア、ムラクモが離れておけて……どうする？ わたしは残るけど」

「私だって残るわよ。言われたから『はいそうですか』、なんて気が済まないわ」

「だよ。というわけでムラクモ！ 頑張れー！」

『お前等……』

溜息を付いたムラクモは言っても何も聞かないだろうと思い、ウーティの攻撃に集中することにした。ウーティは、凝縮した水球に更に雨を取り込んだのか、少し大きくなった水球をまた凝縮していた。

（今降ってる雨が全部集まったらどうなるんだ？）

等と思っていると、

「ムラクモ！ 来るよ！」

キャシーの声が聞こえ、ムラクモがウーティを見た瞬間、水球は放たれた。

全身の力を一瞬だけ抜いたムラクモは、眼前に迫った水球を打ち上げた。

「「は？」」

キャシーもメルシアも、そしてウーティもあまりに予想外のことだったのか上を見る。そして空高く打ち上げられた水球は停止した所で一気に弾け、凝縮されていた水がムラクモ達のいる所に一気に降ってきた。

「な！ あんたね！ もう少し別の所に打ち上げなさいよ！」

「だから離れてろって言っただろ！」

「離れてろって言っただろって」

「こんなことするなんて思わないわよ！」

「知るか！」

「知るか、だって」

「貴女も！ どうしてそんなに暢気なのよ！」

「ええ！ わたしにくるの！？ ムラクモ！」

慌てる二人を他所にムラクモは盛大な溜息を付き、ノアを上空に広げた。降り注ぐ水は全てノアが受け止め、包み込んだ後そこに停滞する。ムラクモはその間にウーティに接近し、鳩尾に掌底を打ち込んだ。

『悪いな？ 暫く眠っててくれ』

薄れゆく意識の中でウーティが見たのは、困った様な笑みを浮かべるムラクモだった。

——ありがとう

そう一言言つて、ウーティは意識を失い、ムラクモに寄りかかる様にして倒れ、ムラクモはしっかりとその体を抱き留めた。

『よく頑張った』

抱きかかえ、泉から上がったムラクモはノアをゆっくりと泉の降ろしそこで通常の状態に戻させた。するとノアが包んでいた水が泉に広がり、泉は見た目だけは元の状態に戻った。

その後、ノアが魔物達を収納し、適当な所で三人は休憩することにした。

「ちょっと、これがホントにガラムなの？ 食べたことが無い訳じゃないけど、とても信じられないわよ？」

『んだよ？ 調理するとこ見てただろ？』

「なんて言っただの？」

「調理するとこ見てただろって。まあ、いいんじゃない？ 美味しいごはんが食べられるんだからさ」

キャシーのその言葉にムラクモの隣で同じように肉を食べているウーティは何度も頷いた。

ウーティは、寝具に変形したノアの中で眠っていたが、ムラクモが調理を始めて暫くすると匂いに釣られたのか目を覚ました。そしてムラクモを見るといきなり飛びつき、それから離れなくなった。

その時、キャシーがまた羨ましがっていたのは別のお話。

「ほら、ウーティも美味しいって言ってるし」

「……そうなんだけどね……。まあ、いいわ。それで、ウーティ？ 泉はどうするの？」

急に話を振られたウーティは食べていた肉が詰まってしまい慌てて水のみ、背中を軽く叩いてくれたムラクモにお礼を言うように手を挙げ、立ち上がり泉の中央に立った。

ムラクモ達もその様子を見る。

ウーティが目を閉じ、両腕を広げゆっくりと上に上げると、泉から小さな水球が浮かび上がり、ウーティの頭上で一つに集まっていた。その集まっている物は、先の戦いで泉に混ざった雨や、人と魔物の血等であり、この泉を穢してしまった原因となる物だった。原因が取り除かれた泉は、黒から本来の透き通った青に戻った。

ウーティはそれを凝縮した状態で右手に持ち、ムラクモに差し出すように手を出した。

ムラクモもそれで理解し、ノアを出す。

ノアはウーティにゆっくりと伸びていき、右手にある水球を呑み込んだ。

「これで元通り？」

戻ってきたウーティはまたムラクモにくっついた。余程気に居られている様である。

メルシアの疑問を解消すべく、ムラクモは畔に屈み水を両手で掬い一口含んだ。

「どう？」

『大丈夫だ。まあ、前の味を知らねえから良く分からねえけど、かなり美味しいよ』

キャシーとキャシーから聞いてメルシアも同じように水を掬い一口飲むと、直ぐに美味しいと言った。

その様子を見ていたウーティは、もう水を飲んで苦しむ者が出なくなっただけを喜び、そっと涙を流した。

『頑張ったな』

ウーティの頭を、ムラクモはそっと撫でた。

（なんか、旅に出て毎日こんなことしてるな……俺）

その後、夕食を食べ終わった四人は寝ることにし、キャシーとメルシアはノアに包まれて直ぐに眠りに付いた。ムラクモは見張りも兼ねて起きており、ウーティはそんなムラクモに寄り添っていた。

月明かりに照らされる二人は、傍から見ると夫婦にでも見えるのではないだろうか？

（「寝なくて良いのか？ まだ疲れはとれてないだろ？」）

（「貴方たちは明日にはここを去るのでしょうか？ だから、せめてそれまでの間はこうさせてください」）

ノアを使い文字列を作るムラクモに対し、ウーティは水を使って文字列を作り答えた。

（「確かに去るけどな……二度と来ない訳じゃないぜ？ いつになるかは分からねえけど、また来るしな」）

（「本当ですか？」）

ムラクモは頷いて返した。

（「そうですか。では、その時を楽しみにしていますね？」）

（「ああ。なんか土産でも持ってくるよ。何がいい？」）

（「本当にいいんですか？」）

（「おう」）

（「では、ファイゼンで作られる、お水を頼んでもよろしいでしょうか？」）

ファイゼン大陸は、ガルデシアで一番水源が豊富なことで有名で

あり、様々な効果を与える水が売られている。身体能力を向上させる物や、毒や痺れなどを解消する物などが主であり、通常の毒消しなどの様に何度かに分けて使うことが出来、長旅をする者に取っては重宝される。

（「どんな水なんだ？」）

（「一時的に、言葉を話せない者でも話すことが出来る物です。例えば、わたしやあなた様の様に」）

（「そんな水があるんだな」）

ムラクモは、自分には効果がないだろうと思いながら答えた。

（「はい。ですが、その水を作る材料は、＜アクア・ドラゴン＞からしか手に入れることは出来ませんから、まずは海を泳ぎ回るアクア・ドラゴンを倒さないといけないんです」）

龍種はその殆どがライドメイル大陸にいますが、アクア・ドラゴンの様に世界中の海を泳ぎ回る者も存在しており、年に何度か被害を受ける船が出ている。といっても、アクア・ドラゴンにとってはただ泳いでいるだけなのだが……。

（「へー。ま、大丈夫だろうさ。それで、どうしてファイゼンじゃないと駄目なんだ？」）

（「アクア・ドラゴンの角から、その水を作り出すことが出来るのは、ガルシデアでもファイゼンだけですから」）

（「じゃあ、どこかで船でも手に入れて海を回ってアクア・ドラゴンをぶっ飛ばして角もぎとってファイゼンに持って行けばいいんだな？」）

（「大雑把に言えば、そういうことですな。お願いできますか？」）
（「ああ。次来る時はその水を持ってくるよ」）

（「ありがとうございます」）

ウーティは笑って、更にピッタリとムラクモに寄り添った。

それから暫く経ち、ウーティもノアに包まれ眠りについた。

ムラクモは、眠る三人の周りをノアに護らせ、ずっと月を見ていた。

翌日、目を覚ました三人はノアが汲んだ水で顔を洗い眠気を飛ばした。ウーティも、疲れは綺麗にとれているようだ。

「おはよう、ムラクモ」

『おう。メルシアはまだ眠いのか？』

「メルシア、まだ眠い？」

キャシー、ウーティ同様水は浴びたが、どうやらメルシアだけはまだ眠気が残っているらしく、うとうとしていた。

「うっ……」

「眠いみたいだね」

『だな』

結局メルシアは目が覚めるまでムラクモが背負うことになった。

昨日の様に、ムラクモが大太刀を落下防止として使いメルシアを背負い、キャシーは胸当ての調整をして準備を終えた。

泉の出口までウーティは見送る為ともう一つ用事があり付いてきた。

（「これを」）

ウーティが差し出したのは、小さな三つの水球だった。

「なに？」

手が塞がっているムラクモの代わりにキャシーが受け取りそう聞くと、ウーティは簡単に説明した。

（「それは大気中にある水属性のマナを常時少しずつ吸収する物です。小さいですが、かなりの量の水を確保出来るので、砂漠などでは役に立つかと」）

「へ〜……すごいね。ありがとう」

（「いえ。それから、ムラクモ様のその短刀、それにわたしの力を宿しておきましたので、海等、水の中でも呼吸が出来ます。アクア・ドラゴンと戦う際や火属性の魔物と戦う際は御活用ください」）

（「おお、サンキュ」）

（「いえ。メルシアさんにもよろしくお願いしますね？」）

「うん。それじゃ、そろそろ行くね？」

（「水、持ってくるからな？ まあ、気長に待っててくれ」）

ウーティは笑顔で頷いた。

ムラクモはノアに代わりに手を振って貰い、キャシーは後ろ歩きをしながら両手を振ってムラクモの後を付いていき、泉を後にした。

——いつまでもお待ちしております。ムラクモ様

三人を見送ったウーティは空を見上げ、またムラクモに会える日を楽しみにしながら泉の中に戻った。

第十一話・神の泉を護る者（後書き）

次は、キャシー、メルシア、ウーティのことを載せます。

キャラ紹介2

キャロルⅡドⅡスレイジア 女 十四歳

属性 光

身長 153?

体重 43?

利き腕 右

ギルドランク E

スレイジア家の一人娘。十年前のある日、父親について行った宝物庫で魔導書に触れてしまいそのショックでそれまでの一切の記憶が消えてた。同時に左目が黒くなる。それ以降目に映る物全てに興味を持つようになり、剣術等も騎士達の訓練を見ながら我流で腕を磨いていく。外界に強い憧れを抱き、十四歳になったある日の夜、宝刀シュヴァイスを腰に提げ城を抜け出した。王国付近にある始まりの森にて、ワイバーンに襲われた所をムラクモに助けられ、それ以降、名を<キャシー>と偽り姿も魔法で変え共に行動するようになる。尚、ムラクモとの会話は読唇術で行っている。

メルシア 女 年齢不明

属性 闇

身長 165?

体重 48?

利き腕 左

ギルドランク A

ムラクモとキャシーが最初に立ち寄った街、レークナで出会った少女。身の丈程の大太刀・ドラゴンキラーを携えており、片手でも軽々と操ることが出来る。ムラクモが金髪男と戦っている所を見て興味を持ち尾行していた所、よからぬことをしようとしていた男二人の存在をムラクモに教えられ、斬り殺そうとした。が、ムラクモに止められ、成り行きでムラクモと戦うことになり敗北する。キャシーがムラクモとの会話に読唇術を使っていることを知り、初めは暇潰し程度にやってみようと思い始めたがマスターしないと気が済まなくなり以降二人と共に行動を始める。ムラクモから与えられる痛み喜びを感じる特殊性癖を持つ。

ウーティ 女 年齢不明

属性 水

身長 160?

体重 46?

神の泉を守護する魔物だったが、戦争の影響で自身、泉共に穢れてしまい、自分を制御できなくなっていた。そこに、ムラクモ達が現れ、ムラクモとの一騎打ちとなり敗北したことで正気を取り戻し、泉も元に戻った。ムラクモ達に大気中の水のマナを集める「水玉」を与える。ムラクモの持つ短刀に力を宿し、海や水の中でも呼吸が出来るようにした。助けてくれたムラクモに恋愛感情を抱く様になり、以降泉を訪れた魔物には必ずと言って良いほどそのことを話すようになる。ムラクモと話す際は、ノアがするように、水を用いて文字を作り会話した。

第十二話・灰色の剣

「メルシア、良く寝てるね？」

『やっぱ、水掛けて貰えばよかったかもな』

「あはは」

コマナシを目指し出発して一時間が経過するが、メルシアは未だ目を覚まさずムラクモの背で眠っている。

余程ムラクモの背中が心地良いのかも知れない。

（そうだ。「キャシー」）

「ん？」

『コイツが寝てる間に出てきた魔物、全部お前が相手してみろ』

「え！？　なんで？」

いきなりのムラクモの提案に驚きを隠せないキャシーが大声を上げそう聞き、ムラクモは自分の考えを話した。

『例えばだ。お前が俺かメルシアのどっちかと戦うとする』

「うん」

『どっちかにでも一太刀入れる自信はあるか？』

その問いかけに、キャシーは顔を俯かせ小さな声で「ない」と答えた。

キャシーは、実戦経験こそまだ少ないが戦闘経験はムラクモ同様

十年程はある。だが、ムラクモが毎日魔物との実戦経験を積んだのとは違い、キャシーは命の遣り取りが無い、悪く言えば温い戦いをしていた。例えば戦闘経験を積んだ時間が同程度だとしても、その濃密さが違えば濃い方が強くなるに決まっている。

キャシーもそれは分かっているのである。

（ムラクモとメルシアの動きは、今のわたしがどう足掻いてもついていけない物じゃない。昨日の泉での戦いの時だって、メルシアは決して本気なんかじゃ無かった……………ムラクモと戦った時の速さ。あれに比べたら全然遅い）

（結構意地悪なこと言うのね……………出来ればそれを私にして欲しいんだけど。まあ、キャシーの今後を思っていることだろうけど……………それにしても、この人の背中、気持ちいいわね）

実を言うとメルシア、先程キャシーが驚きの声を上げた時に目を覚ましたがムラクモの背中にいたいが為に寝たふりをしていた。

（さて、どうするか。こいつは痛めると喜ぶからな……………）

そして、そんなメルシアに気付いているムラクモは、どうメルシアに制裁を加えようか考えている。

（「キャシー」）

「……………あ、なに？」

『メルシアの脇腹を突つけ。こいつ起きてやがる』

「え、そうなの？」

『ああ』

言われてキャシーはメルシアを見るが、寝ている様にしか見えず

本当に起きているのかどうか分からない。だが、ムラクモが言うならそうなんだろうな、と思いながらさり気なくメルシアに近づき、

「えい」

とメルシアの脇腹を突いた。

すると、

「ひゃん！」

と、なんとも可愛らしい悲鳴を上げた。

∞

「はいこれ、ウーティから貰ったアイテム」

背中から降ろされた（落とされた）メルシアは大太刀をムラクモから受け取り背中に提げ、キャシーから水玉を受け取った。説明を求めるメルシアに、キャシーは自分かウーティから聞いたことをそのまま伝え、メルシアは素直に感心し腰の荷物袋にしまった。

「さて、キャシーの特訓のことは賛成よ。それで、当面の目的はなにかしら？ あ、一応言っておくけど、私は読唇術をマスターしない限り貴方たちと居るわよ？」

言われなくとも、離れるつもりなど無かった二人は頷き、ムラクモが聞かれた当面の目的を二人に話した。

「アクア・ドラゴン、ね……世界中を泳ぎ回るドラゴン相手に、どう戦うつもり？」

『適当に見つけた所で角もぎ取る』

そうキャシーから聞くとメルシアは、「そんな簡単なことじゃないわよ」と溜息混じりに言ったが、ムラクモは特に気にしていない風だったのでそれ以上何も言うきは起きなかったらしく、先に歩き始めた。

その後を二人も追い、コマナシに向けて改めて出発した。

「そういえば、体術の方はどうするの？」

『教えるには教えるが、俺もお前も我流だろ？ 誰か肉弾戦専門の奴でも居ればいいんだが』

「肉弾戦の専門家。ディロウアに行けば、見つかると思うけど」

「どうする？ それまでに私たちの知識を教えても、却って分からなくなると思うんだけど。それとは別に、仮にディロウアで見ついても、教えてくれるからどうか分からないわ」

（「だからって、それまでの間体術を教えないって訳にもな」）

「そうよね……」

まるで娘をどう育てていくかを相談している様である。

実際この時、馬車に乗っていた行商人とそれを護衛する冒険者達には、三人が家族の様に見えたのかなんだとか……。

「……………」

「……………」

（「うし。ここで考えても答えは出ん。とりあえず、コマナシに着いてから考えるぞ？」）

「……そうね。そうしましょう。貴女も、それでいいわね？」

「うん」

結局そういうことになり、三人は無意識に止めていた足を三度動かし始めコマナシに向かった。

∞

二日後、コマナシに到着した一行は、門でギルドカードを提示し身分を証明した所で中に入った。

始めに宿を取り、とりあえず一週間分の料金、五百ギールを払った後、二階の「209号室」、一番右端の部屋に向かう。

別々に部屋を取るのは面倒と言うメルシアの発言により三人共同じ部屋となった。

キャシーも特に抵抗は無かったらしくすんなり承諾した。

「資金は問題無いみたいだし、食料も泉で調達できたからギルド行きましょう。貴方たち、依頼を受けたことは？」

二人は揃って首を横に振り、なんとなく予想していたメルシアは「でしょうね」と言い、次に、依頼と平行してキャシーの特訓を行うと言った。最低限の荷物を持ち、三人は早速ギルドに足を運び、何か近辺で済む依頼を探している。

「ねえ、これ『蒼い牙』が、オーガを仕留めたらしいぞ?」ん?

メルシアが、丁度良さそうな依頼を見つけ二人にどうか聞こうとした時、ギルドに入ってきた三人組の男女の内、一人の男がそう言ったのが聞こえ、そちらに視線を移した。キャシーもお案じ方向を見る。

ムラクモは特に興味を示さず依頼を探している。

(討伐対象・マツシャー。数は二十。Dランク。……なんか……なんとなくだが、見た目むかつくな)

ムラクモが見ている依頼書には討伐対象のマツシャーの絵が載っている。全長百五十?。体重六十?。頭部は傘の様に広がっており、その所為で目は見えない。長い腕を持っており、その腕を使って移動するが、戦闘時は武器として使うため移動が出来ない。

特にむかつくような所は無いと思われるが、ムラクモは本当に何となくむかつくらしく、ジト目でその依頼書を見ている。

「ちょっと、聞いているの?」

「ムラクモ?」

二人の声が耳に入り、依頼書からメルシアに視線を移すと何かメルシアは不満気な声とは裏腹にその表情は嬉しそうだった。特に気にしないことにして、ムラクモは、「何だ」と口を動かす。

「メルシアがね?」噂が立てば、誰も手を出してこなくなるんじゃないか?』って」

『噂?』

「そう。今入ってきた人たちが言ってたのよ。『蒼い牙がどうのこの』って」

「噂」を読み取ることが出来たメルシアは内心喜びながら説明を始めた。

「私たちでパーティを組んで難度の高い依頼をこなしたり、強力な魔物を倒していけばその内噂が立つようになるわ。そうすれば、顔も知られることになるから下手に手を出そうとしてくる奴は減る筈よ？」

『成る程な……単純だが効果はありそうだ。それに、俺とキャシーは底ランクだしな。ランクの低い奴が大きな依頼をこなしたりすれば知名度も一気に上がりそうだ』

「うん、無理」

まだまだ、長文を読み取ることが出来ないメルシアはキャシーに通訳を求めた。

「効果はありそうだって。それに、ムラクモとわたしはランクが低いから、それも利用すれば知名度を上げることにもすぐに出来るかもだってさ」

「あら、結構考えてるのね？」

『おう』

依頼は後にし、三人は早速パーティ登録をすることにした。

キャシーがギルド員に声を掛ける。

こういうことは率先して引き受ける為、自然と二人も任せることに

し、後ろで話を聞くことにした。

- ・最低人数は三名
- ・最高人数は六名
- ・パーティ名の変更はメンバー全員が賛成した場合に限り可
- ・依頼はパーティ内の最高ランク冒険者の二段階上まで受けることができる

最低限の説明をした後ギルド員はカードの提示を求め、三人はカードを出した。その後、何か作業があるらしくその間にパーティ名を用紙に書くように言ってギルド員は奥へと消えた。

「パーティ名……どうする？」

キャシーが問うたが、二人共そんな物は全く決めていなかった為答えられず、キャシーも同様だった。結局ギルド員が戻ってきても名前を決めることは出来ず、決まったらまた来てくださいと言われ、テーブルに座る三人。

誰も何も言わず中央にしている用紙を凝視する様は何とも異様な光景に見えることだろうが、三人はそんな周りの視線に全く気付かなかった。

「『おかしな三人組』？」

「却下。何が悲しくて自分たちをおかしいなんて言わないといけないのよ」

「だよね」

『『おかしな三兄妹』』

「『おかしな』は、なんとなく分かったけど却下。とりあえずそれから離れて」

「じゃあ、メルシアは何かあるの？」
(確かに)

言われてメルシアは考え込み、暫くしても何も浮かんでこなかったのか目を閉じて黙考してしまった。その間に二人は飲み物と軽食を注文し、少し早めも昼食を摂っていた。

ちなみにムラクモはサンドウィッチ、キャシーはイノセイドから取り寄せられたと言う米と味噌汁、焼き魚を食べている。

一応メルシアの分も飲み物だけ頼んでおいた。

(黒い三人組み……キャシーは黒くないか。えつと……ムラクモと私の属性は闇。キャシーは光でしょ。マナの色は黒と白………黒白三人組？ いやいや、三人組から離れよう。うゝゝゝん………黒と、白。混ぜたら……灰色。私たち三人の武器は、共通して「剣」。「灰色剣」？ 違う………あ！)

メルシアはパーティ名を思いつき、それを伝えようと目を開けたが見たのは、

「ご馳走様でした」

「人が考えてる時に何ごはん食べてるのよ！」

手を合わせるキャシーとムラクモだった。

メルシアは思わず切れてしまい、テーブルに両手を叩きつけ、倒れそうになったグラスを全てノアがキャッチしなんとか事なきを得

た。

周りの者が注目したことはわざわざ言う必要は無いだろう。

「あ、メルシア。名前、浮かんだの？」

「貴女ねえ……まあ、いいわ。ええ、考えたわよ」

（「なんて名前なんだ？」）

ムラクモに聞かれ、メルシアは一つ咳払いをしてその名を答えた。

「『灰色の剣』^{（グレイソード）}なんてどうかしら？」

結構良いと思うわよ、とメルシアは最後に付け加えた。

「へえ、格好良いね」

「ありがと。貴方も、良いかしら？」

『ああ』

「じゃあ、決定だね」

キャシーが用紙に「灰色の剣」と書いた。

「あら、可愛い字ね」

文字を見たメルシアが言うと、キャシーは少し顔を赤らめた。

この時のキャシーは、周りの男性陣から見ると大層可愛らしく写

った様で、近くに居た殆どの男性陣が見惚れていた。

そんなことに気付かず、ムラクモは席を立ち、キャシーの横に立つと頭を撫で、メルシアをコッソンと軽くノアが小突いた。

「あん」

∞

その後、パーティ登録を終えた三人は依頼を受けるのは明日からにし、キャシーの特訓を始めることにした。

レークナで金髪男と戦った時同様、ギルドの裏庭にて行われる。

「それじゃ、まずは私が相手をするわ」

大太刀は背負ったまま抜かず拳を構えるメルシアに対し、キャシーは若干不満気な顔をしながら、何故剣を抜かないのか尋ねるが、メルシアは「今の貴女には必要ないからよ」と言い切った。

「じゃあ、わたしも抜かない」

「いいえ、貴女は抜きなさい。これは体術の練習じゃないの。剣を使わないと意味が無いわ」

（まあ、そう言ってる本人が抜いてないんだがな……）

半ば呆れているムラクモだが、言っても聞かないんだろうな、
と思い何も言わないことにした。

「でもメルシアは抜いてない」

「二度も同じことを言わせないで。今の貴女には必要ない。ほら、

早く掛かってきなさい？ この時間すら惜しいんだから」

その言葉にキャシーはムキになり剣を抜いてメルシアに突っ込んだ。

（あれくらいで怒るなよ……会った時の方がまだマシだ）

ムラクモがそう思うと同時に、メルシアはキャシーの一撃を難無く躲した。そして拳を突き出し寸止めすると、拳圧によりキャシーの髪がふわりと揺れた。

「駄目。戦闘中に目を閉じるなんて殺されても文句言えないわよ。ムラクモ、キャシーを縛って」

「え？」

（「任せろ」）

「え？ ちょ、ムラクモ？ じ、冗談……だよな？」

「ふふ〜ん」

「あ、あはは」

楽しそうに笑うメルシアとは正反対に、キャシーは乾いた笑みを浮かべながら後退りするが、

「冗談——な訳無いでしょ！ ムラクモ！」

元気に言い放ち、ムラクモもそれに応じてノアを出しキャシー捕らえた。

「ちょ！ 待って待って！」

「待たない。ムラクモ、このまま宿に戻るわよ」

『おっ』

シュヴァイスはノアが拾い、キャシーは抵抗空しく宿へと連行された。

∞

「うう……」

部屋に戻ったムラクモはキャシーを椅子に乘せ改めて縛り直した。もちろん加減はしているが、キャシーではどうすることも出来ない。

「それじゃ、始めるわよ？ 私がさっきみたいに寸止めするから、目を閉じないように頑張りなさい。あ、そうだ。ムラクモ、時間掛かると思ってからドラゴンキラーを武器屋に持って行ってくれない？ 研ぎたいんだけど」

『それならノアに頼めば出来るぞ？ 一瞬で終わらせてやる』

「うう………」 『ノアに頼めば一瞬で済む』 って」

「そう？ じゃあ、お願いするわ」

『おつよ』

ムラクモは特訓を始める様に言い、メルシアは早速キャシーに向き直った。少しは時間稼ぎが出来るかと思っていたキャシーだったが、自分自身が短縮させてしまった為少し後悔していた。

（でも怒られそうで怖い）

まるつきり子どもの様な理由だが、仕方ないだろう。

その後三時間程、209号室内にはキャシーの短い悲鳴が響いて

いた。

「うっ……怖い……」

「今日はこれくらいで良いわね」

メルシアが終了宣言をし、ノアによる拘束が解かれたことでキャシーは気を抜いてしまい、

「フッ！」

「ひゃっ！」

メルシアの拳に一切反応出来なかった。

もちろん寸止めだったから傷は無い。

「やっぱり直ぐには上手く行かないか……まあ、いいわ。これから先、不意打ちするから私の一挙手一投足を見逃さない様に。ああ、もちろん読唇術の練習中も例外じゃないから」

「う……分かった。ムラクモは……？」

もしかしたらムラクモもやるのではないかと思い、一応確認しておこうと聞くキャシー。

『まあ、メルシアの拳に反応出来ないんじゃない、俺のは無理だろうが……そうだな、メルシアより少し早い程度で、俺も偶に参加するよ』
「偶になら、大丈夫かな」

「ッ！」

「ひゃっ！」

「気を抜かない」

「は……はい」

思わず気圧されたキャシーは敬語で返事をしてしまった。

（（当分は休まる暇がないよ（な）……）（

二人は同時にそう思った。

第十三話・一太刀

朝陽がスレイジア大陸を照らし始めた頃、コマナシの宿に昨日から宿泊している三人の内一人、メルシアが目を覚ました。

普段来ている服とは違い、薄い黒地のシャツと黒い下着という軽装で、前に垂らして結んでいる髪をは解いている為ストレート。

小さく欠伸をした後、いつもの革製の服に着替え隣のベッドで布団を蹴散らして眠っているムラクモを一瞥し、一応布団をかけ直してあげた後、眠気を飛ばす為洗面所へ向かう。

歯磨きと洗顔を済ませ、次に髪を整えていつもの様に前に垂らして胸元辺りで一つに束ねて、身嗜みのチェックをする。

「よし」

洗面所を出て戻してみると、またしてもムラクモは布団を蹴散らしていた為、仕方なくまたかけ直す。そして、さっきは見ていなかったが、キャシーはどうなのかと思い目を遣り、ちゃんと寝ていることを確認して安心する。

（そういえば、軽装のキャシーって初めて見るわね。レークナの場合は、何故か胸当てを外しただけだったし……）

今のキャシーも、メルシア同様、普段とは違い軽装である。

壁に立て掛けていた大太刀を背中から紐で結んで提げ、外の空気を吸おうとベランダから飛び降り宿の付近を適当に散歩して少し残っていた眠気を完全に飛ばして宿に戻ったが、

「あ、鍵掛けっぱなしだった……」

そのことを思い出し、溜息を付いて仕方なくまた外に出ることに。

裏に回り自分たちが泊まっている部屋の下に着き、跳躍することでベランダに移りそこから中へ入ると、目に入っただのはまたしても布団を蹴散らして眠るムラクモだった。

「もう……子どもじゃ無いんだから」

そう言いながらも、またかけ直すメルシアはもしかしたらお母さん気質なのかも知れない。

整えて、自分が見ている間にまた蹴散らさないか確認したメルシアは大太刀を机に立て掛けて椅子に座り、二人を観察していると、キャシーが寝返りを打った。だが、既にベッドの左に寄っていた状態で左に寝返りを打ったので、

「ッ！ 痛い……」

「でしょうね」

ベッドから落下し、ゴン、と盛大な音を立てた。

「あ、メルシア……おはよう」

「おはよう。顔、洗って来なさい？」

キャシーは間延びした返事をした後、小さく欠伸をしながら洗面所へ向かった。程なくして水を流す音と、「こぶになってる」と嘆く声を聞こえ、メルシアは目を閉じて溜息を付いた。

ムラクモは未だ夢の中である。

「平和よね……………」

呟くと同時に、バサ、という音が聞こえたメルシアは、目を開きムラクモを見ると、

「また……全く」

案の定、また掛け布団を蹴散らしているムラクモがそこにはいた。

（直してもどうせ蹴散らすのよね…………）

そう思いながらも、またムラクモの布団をかけ直して上げたメルシア。そして、また蹴散らそうとしても出来ないようにベッドに腰掛け、なんとなく天井を見る。

それと同時に、洗面台からキャシーが顔を拭きながら出て来、メルシアを見て何をしているのか聞いた。天井を見上げながら答えたメルシアの答えに納得したのか、小さく笑いながら、メルシアのベツドに腰掛ける。

そうすると、必然的に二人は向かい合う形となる。

「なんかさ…………」

「ん？」

暫くの間二人とも無言だったが、キャシーの声を聞きメルシアは顔を正面に戻した。

「平和、だよね」

「……………そうね」

頬笑み合った二人は、その後同時にムラクモを見た。

「ムラクモのお陰、だね」

「ふふ。少し前までは、ずっと独りだったのにね……………不思議な物だわ」

どこか感慨深げに言うメルシアを見て、キャシーは彼女が読唇術をマスターした後はどうするのか、という疑問が浮かんだ。

『読唇術をマスターしない限り貴方たちというわよ』

ほんの二、三日前に彼女が言ったこの言葉に、嘘などが含まれていないかどうかは、キャシーもムラクモも分かっている。本当にマスターした時、メルシアがどうするのか、それは彼女自身が決めることだが、キャシーは勝手だと言うことが分かっている。『ずっと三人でいたいな……』と思っている。

「ねえ——っ」

知らずの内に言葉を発したキャシーは慌てて口をふさいだが、既に遅くメルシアにはハッキリと聞こえていた。どうしたのか、と疑問を浮かべながら、キャシーを見ている。

「うっん。何でもない」

「？　なら、いいけど。何かあるなら、遠慮無く言いなさいよ？」

「うん。その時はちゃんと言うよ。わたし、そろそろ着替えるね？　ムラクモも起きちゃうかも知れないから」

「ええ」

その後、起きていないとはいえ異性が居る場で着替えるのは恥ずかしかったのか、いそいそとキャシーは着替え、その間メルシアはムラクモの頬をつついて遊んでいた。

（——ごめんね？）

何に對しての謝罪だったのか。

それは、メルシアにしか分からないだろう。

「もう少しだけ……。もう少しだけ……。貴方たちと」

誰にも聞こえない程の小さな声でそう言いながら、彼女はムラクモの頬を撫で、悲しげな笑みを浮かべた。

「よし。メルシア、可笑しい所ないよね？」
「ええ」

着替え終わったキャシーが振り向いた時には、いつもの彼女に戻っており、何事も無かったかのようにキャシーの問いかけに答えた。

その後、二人はムラクモが起きるまでの一時間程を他愛の無い話をして過ごした。顔を洗って尚眠気眼のムラクモを引っ張る姿は、周りから見るととても心温まる光景として映ったのかも知れない。

女将やウエイトレスは皆頬笑みを浮かべて三人を見ている。

「戦う時はあんなに素早く動くのにね？」

「その時は多分、別のスイッチが入ってるのよ。キャシーも、見たことがあるんじゃない？ 普段と何かをしている時だと、まるで別人みたいになる人」

言われてキャシーは暫く考え込み、やがて思い至ったのか右手を軽く握り左手にポンと当て、

（和むわね）

それを見たメルシア、他一同はそう思った。

「えつとね……お母さんの友達で、マリアさんって言う人がいるんだけど、その人、魔術師なの」

「ええ」

「それで、なんか凄い魔術師で、独自の魔術を作り出したりするの。普段はおっとりしてる人なんだけど、魔術のことになると、別人みたいに豹変して……怖かったなあ……」

「正しくそれよ。でも、その『マリアさん』には少し興味が湧いたわね。独自の魔術なんて、それこそ天才でもない出来ないことだわ」

「うん。ギルドに登録したら、確実にSSSにはなってたわね。つて、お母さんもマリアさんも言ってた」

「凄いわね」

素直に感心し、メルシアは近くを通りかかったウェイトレスに朝食、飲み物にコーヒーと紅茶を頼んだ。

「ムラクモさんは……どうしましょうか？」

名前を知っている理由は、単に宿泊する際、用紙に名前を書くからである。

未だ眠そうな彼を見ながら、ウェイトレスは苦笑しながら二人に聞き、キャシーも苦笑で返した。それを見て呆れたように溜息を付いたメルシアが、少し強めのコーヒーを注文し、ウェイトレスは笑顔で応じて戻っていった。

数分後、料理が届いたが、ムラクモは眠気が相当強いのか頭をカクンカクンと揺らしていたが、メルシアが料理を食べ終わる頃によつと目を覚ました。

「あ、おはよう」

『……ああ』

「ほら、これ飲んでシャキツとしなさい？」

ゆっくり頷いた後欠伸を噛み殺したムラクモは、メルシアから差し出されたコーヒーを取り一口飲み、寝起きに飲むにしては強すぎたのか盛大に咽せてしまい、キャシーがその背をそつと撫でてあげた。

落ち着いたムラクモは、礼の代わりとしてなのか分からないが、キャシーの頭を撫でた。それが嬉しかったのだらう。キャシーはふにやりと笑顔を浮かべ、頬は少し朱色に染まっている。

「えへへ」

（ホント……平和だわ）

自分のコーヒーを飲みながら、メルシアは先程と同じことを思った。

「ニーナ、宿に着いたぞ？」

「う……うん？ くああ……おはよう、ガトレアあ」

その時、宿の扉が開き、二人組の男女が入ってきた。

ガトレアと呼ばれた男は、ニメートル近い巨体に黒い鎧を着ており、頭には鉄製のバンダナの様な物を付けている。

ニーナと呼ばれた少女は、頭にはとんがり帽子、手には肘上まである長い手袋、同じく膝上まであるブーツ、そしてマントを装備している。

落ちないように支えている杖は、恐らくニーナの物だろう。先端には黄色い光を放つ球体が付けられている。

ニーナを背負ったまま、ガトレアは受付を済ませ周りの視線を気にすることなく二階の部屋に消えた。

ムラクモは、そんな二人を気にすることなくゆっくりコーヒーを飲んでいた。

208号室。つまり、ムラクモ達の隣の部屋に入ったガトレアは、ニーナを帽子を外してベッドに寝かせ布団を掛けた後、ドアの方を見た。

「先程の男——」

「結構強いよね？」

続けるようにニーナが言い、ガトレアはベッドに目を向けた。光を遮る様に右手を顔の上に翳しているニーナは、口元に笑みを浮かべている。

まるで新しいおもちゃを見つけたように。

「やっとお目覚めか？」

「まあね。それで、どうする？ 後をつけるなら姿隠し、かけるよ？」

起き上がりながら言い、ウィンクをして右手の人差し指をくるくると回すニーナ。

「いや、恐らく掛けても無駄だ。あの赤髪の女は欺けるが……黒髪の女は分からね。男には確実に気付かれるだろう」

それより、とガトレアは話題を切り替えた。

「うん。情報、集めないかね」

対して二ーナも、真剣な顔つきになり答える。

その後、二人は装備を整え宿を出た。

∞

朝食後、ギルドに来たムラクモ達灰色の剣は依頼を探していた。

キャシーとメルシアがお互いに選んだ依頼をどうかと確認し合う中、ムラクモはマッシャー討伐の依頼書をまたジト目で見ていた。心中ではやっぱりむかつかない、と思っているが、先日同様理由は不明。本当になんとなくむかっているようだ。

その間も話し合っていた二人は、受ける依頼を既に決めており、ムラクモにも確認しようと呼びかけた。

「……ムラクモ？」

反応の無いムラクモにキャシーが呼びかけるが、未だムラクモは依頼書を睨んでいる。その視線を追うように、メルシアもその依頼書を見た。

（二十体のマッシャーか。今のキャシーには丁度良い練習相手かも知れないわね）

そう思い、メルシアは横から手を伸ばしその依頼書を取った。それでやっとムラクモは隣に目を向ける。

「どうしたの？」

「やっぱりこっちにしましょう。貴方の練習相手にもなるからね」

依頼書を渡されたキャシーは内容を見、メルシアの言った意味を理解した。

「でも、全部をわたし一人で相手するのは厳しいよ？」

「今はそこまで求めてないわ。マッシャーの攻撃に私の攻撃のイメージを重ねなさい。違いが分かるわよ」

「違い……うん、分かった。やってみる」

「ええ」

依頼書を両手で持ち、キャシーは受付に向かった。

（「お前、さっきの二人どう思った？」）

「女とは互角、男とは分からないわ。どっちも相当の実力者よ」

その後ろ姿を見ていたムラクモは、メルシアの前に文字列を作り尋ね、彼女は直ぐに答えた。Aランクの冒険者である彼女が、良くて互角と言う結果を出したことから、ガトレアとニーナの力が相当の物であることは分かるだろう。

聞いた本人であるムラクモも、あの二人の強さを良く分かっている。

（「キャシーは、まだ何も分からなかったみたいだが」）

「仕方ないわよ。上手く隠してたから……ま、関係ないけどね」

（「そうだな」）

文字列を消した時、キャシーが小走りで二人の元に戻ってきた。

「ただいま」

「お帰り。それじゃ、早速行きましょうか」

『その前に少し特訓していった方が良いと思うぜ?』

「『特訓』? なんの?」

着実に読唇術を会得していつているメルシアは聞き返した。

『剣術。昨日は途中から別の特訓になつてたしな……』

「確かにそうだね。いい? メルシア?」

「分からなかったから説明して」

「昨日、別の特訓になっちゃったでしょ? だから今日は剣術の特訓をしたら、って」

「あゝ……そうね。やりましょうか」

主に自分の所為でそうなったと自覚している彼女は、気まずそうな顔をしながら承諾し先にギルドの裏へと歩き出し、二人も続いて歩き出した。

∞

「それじゃ、まずは一太刀でも入れて見なさい」

大太刀を片手で構えたメルシアに言われ、キャシーもシュヴァイスを両手で持ち正面に構えた。

真ん中に立つてそれを見ていたムラクモは左手を挙げ、特訓開始

の意を込めて振り下ろした。

キャシーが駆け出しますは左から一閃するが、メルシアは一步後ろに下がり回避した。逃さないとばかりに、キャシーは踏み込みながら突きを繰り出すが、メルシアは体を左ずらすことで躲し、大太刀を振り上げた。

次の瞬間に来るであろう衝撃に備え、キャシーは剣を頭上に構えた。

誰であれ、相手が剣を振り上げたなら次に来るのは振り下ろしだと思うだろう。

だが、メルシアはそんなことには構わず右手の掌底をがら空きになっているキャシーの胸に打ち込んだ。

「——ッ！」

左腕を振り上げたままと言う不安定な状態から打ち出されたにも関わらず十分な威力を以て放たれたそれは、小柄なキャシーを軽々と吹き飛ばした。

地面を二回ほどバウンドしただけで済んだが、もしこの一撃が本気だったとしたならばその威力は計り知れない。キャシーは全く想像出来なかっただろう。

「ぐ……げほ……っは、はあ……はあ……」

この一撃だけでキャシーは既にグロッキーになってしまい、荒くなった呼吸をなんとか整えようとゆっくり吸って吐いてを繰り返している。

（胸当てがあるとは言え、今は効くな……）

ちらりとメルシアにムラクモは目を遣り、彼女は少し加減を間違えたと言つようにペロと舌を出した。

「けほ、けほ……すうー……はぁー……」

次第に呼吸の落ち着いたキャシーはしっかりとした足取りで立ち、再び剣を構えた。

「いいわね。この娘のこういう所」

『ああ』

「？」

ムラクモが返事をしたことは理解したキャシーだが、メルシアの言葉は距離が離れてしまった為分からず首を傾げていた。

「気にしないでいいわ。さあ、再開しましょう」

無言で頷き、キャシーはまた駆けだした。

次は上段から斬り掛かり、メルシアにはまた躲されるが予想していたキャシーは勢いそのままに体当たりをした。メルシアはバックステップをした後、大太刀を振るい、切っ先がシュヴァイスの刀身にぶつかり高い金属音が何度も響いた。

昼間だと言うのに、火花がハツキリ視認できる程散っていることが一撃一撃の威力を物語っている。

（こんなに長い剣を、どうやってここまで自在に）

形勢がキャシーに有利になったかと思えたが、直ぐにそれは覆され彼女はメルシアの大太刀から繰り出される攻撃をひたすら防ぐことしか出来ない状態となっている。

上から下から右から左から、まさに縦横無尽とも言える斬激がキャシーに襲いかかり、徐々に剣を握る手から力を奪っていく。

（もう……だめ……）

しかしそれは、キャシーが観念すると同時に終わりを告げた。

「——よし。今日はここまで」

後一撃でも貰えば剣は弾かれる。

その状況で、メルシアは大太刀を鞘に収めた。

「え？」

（「よくやった」）

「……ムラクモ」

ムラクモはキャシーの頭に手を置いた。そのまま、いつもの様に優しく撫でると最後にポンポンと軽く二回叩いて離れた。

その後二人の元までよったメルシアも、同じようにキャシーの頭

を撫で、体当たりのことを評価した。自分の攻撃が躲されることを見越しての追加攻撃は、十分評価に値すると判断したからである。

「でも……一太刀も入れられなかった……」

だが、キャシーは気落ちしながら言った。昨日に引き続き全く良い所がなかったと思い、ショックを受けているようだ。

「あのね、貴女と私じゃ踏んできた場数が違うのよ？ 経験もね……だから、今の貴女が私に勝てないのは当たり前のことでもあるのよ。酷い言い方だけどね。……それに、良い所はあったでしょ？」
「さっきの、体当たり？」
「そう。誰にでも出来ることじゃないの。それと、もう一つ」

左手の人差し指を立てるメルシアの顔には、小さく笑みが浮かんでいる。

「——今日は目を閉じてなかった」
「え、うそ？」

「本当よ。必死になって、自分でも分からなかったんでしょ？ ね。なにせよ、これは大きな進歩だわ。ね、ムラクモ？」

ウインクをしながらムラクモを見るメルシアに続いて、キャシーも視線を横に向けると、彼は確かに笑って頷いた。

『拳の方はまだ分からねえが、確かに目は閉じてなかったよ。昨日の今日でここまで成果が出るとは思ってたけど……流石十四歳、まだまだ成長期ってことだな』

「それ、褒めてるの？」

『おつよ』

（やっぱり長い言葉は分からないわね……悔しいなあ）

『ま、当面の目標はメルシアに――太刀入れることだな』

「……………うん。頑張る」

『ああ』

すっかり置いて行かれたメルシアは若干不満を感じながらも二人を見て笑みをもらし、空を見上げて思った。

（本当に……………平和だわ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535z/>

語ることの出来ない剣士

2012年1月15日01時48分発行